



アンテルナシオナ
ル・シチュアシオ
ニスト 第6号

シチュアシオニスト・イン
ターナショナル

目次

1. 武装のための教育
2. 都市計画の批判
3. ふたたび、解体について
4. 無条件の防衛
5. 統一的都市計画事務局の基本綱領
6. 日常生活の意識的変更のパーспекティヴ
7. 文化における社会的抑圧について
8. パタフィジック、形成途上の宗教
9. 都市計画に反対する論評
10. シチュアシオニスト情報
11. 付録資料 ポトラッチ（準備中）
12. 解説 西ドイツのシチュアシオニストたち 池田浩士
13. 解説 都市計画の幻想 布野修司

訳者改題

フランスでは、1936年のレオン・ブルムの人民戦線内閣によって、年間15日間の有給休暇の制度が法律で定められ、労働者にとっての「余暇」の権利が生まれたが、当初は、実際にこの権利を享受したのは、そのための蓄えと精神的ゆとりを持った少数の者にすぎなかったようだ。フランスの「余暇」の歴史を研究するジャン＝クロード・リシェとレオン・ストロースによると、多くの労働者は、この長い休暇を、せいぜい郊外への日帰りの行楽に出かけるのに使う程度で、あとは厳しい日常の労働から離れた休息のための時間に充てるか、さらには、休みを利用してブドウの刈り入れのようなアルバイトに精を出す者さえいた。今日のフランスに見られるような、大規模な観光旅行や山や海辺のヴァカンス村への滞在が多くの労働者の間での習慣になったのは、フランスが高度成長を遂げた1960年代に入ってからにすぎない。50年代から60年代にかけて、ホテルやキャンプ場、道路や鉄道が整備され、〈フランス旅行クラブ〉や〈観光と労働〉、〈青少年キャンプ・大衆観光中央機構〉、〈地中海クラブ〉、〈家族ヴァカンス村〉などといった新旧の団体が次々とヴァカンス村を開設し、増大した労働者の余暇時間と経済的な余剰をすくい取るようになっていったのである。なかでも、シチュアシオニストのこの「論説」で言及されている〈地中海クラブ〉は、それまでになかったまったく新しいコンセプトでこの「余暇」を「楽しむ」材料を提供した。時計も決められたスケジュールもなく、人々が現実の社会を忘れて広々とした空間の中で一時を過ごす——テニスやサイクリング、ヨットでのクルージングなど、気晴らしの材料はおおよそ考えられうる限りのものが提供されるという〈地中海クラブ〉のヴァカンス村は、日常的な時間と空間から完全に切断された場をとことんまで追求して商業的に「成功」した最初の例である。

シチュアシオニストがここで批判するアンリ・レイモンは1959年6月号の『エスプリ』誌に寄せた〈地中海クラブ〉の——ヴァカンス村の訪問記「パリニュロの人間と神々——余暇社会に関する考察」のなかで実際、次のように書いている。「村に入ることによって生じる〔日常との〕この切断の向こう側には、果てしない時間が広がっている。余暇の時間だ。『今が何時かも、今日が何曜日かも、私はまったく知らない』というのが、満足すべき決まり文句だ。それは拘束からの解放の象徴そのものである。空間も、他の所では単なる時間の標識と混同されるまでに抽象的だか、ここでは逆に、あらゆる多様な活動の源である。余暇社会では、提供されるほとんどありとあらゆる種類の活動から自分の活動を決めるのは、私自身の歩みである。村は1つの空間への回帰を提供してくれるが、その中では歩行の時間によって社会生活への完全な参加が可能になる。時間は短く、時間の役割は小さくされている。逆に空間は広く、その広さこそが活動の豊かさの枠組みとなっている。この空間こそがあらゆるものを測る尺度となっているのである」（前掲書409—410頁からの孫引き）。アンリ・レイモンはこのほかにも、『フランス社会学雑誌』（1960年7—9月号）に掲載された「具体的なユートピア——あるヴァカンス村に関する研究」と題する文章で〈地中海クラブ〉を絶賛している。

しかし、1年のうちのわずか2週間か3週間のこうした生活——それ自体、退屈だとは思わないのだろうか——のために、あとの50週を奴隷のような労働と貧しい私生活に費やさねばならないとすれば、そんな生活ははたして幸福と言えるのだろうか。アンリ・レイモンのような社会学者は、そうした問いを立てることなく、ヴァカンス村をユートピアと同一視することで、やすやすとヴァカンス産業のお先棒を担ぐこんな論文を書いてしまうのである。そこには、「余暇」と「労働」、そして「私生活」を抽象的に対立させて、それぞれが「分離」され、それゆえ人間の活動の全体性という観点からは「疎外」されているという現代社会の現実を疑問視することも、それを変革しようとすることも忘れた社会学者のぶざまな姿がさらけ出されている。ヴァカンス村という欺瞞的な「夢」を目の前に差し出されて、社会学者のように簡単にだまされることのないように「武装」すること。さらに、ヴァカンス産業の差し出す人間関係と生活体験のモデルに勝る魅力的な日常生活の革命を構想すること。それを、革命を唱える組織そのもののうちにおいても実践すること。シチュアショニストが提案するのは、〈地中海クラブ〉のような日常生活から分離したユートピアのパロディではなく、「個人生活のあらゆる空間・時間を自由に構築する」という日常生活の全局面の変革であり、そのために「労働—余暇—私生活」の分離を克服しつつ「人々の参加と創造性」の解放を保証するような「生活体験の全側面において明確に関与する集団的計画」を実行に移すことである。それが彼らの言う「武装としての教育」なのである。

革命を語ることに何か滑稽なところがあるのは、明らかに、組織的な革命運動が現代の国々からずっと昔に消え去ったからである（そうした国にこそ、社会を決定的に変革する可能性が集中しているのであるが）。しかし、それ以外のことはすべて、それよりもずっと滑稽である。というのも、それ以外のことは、既存のものごとであり、既存のものを受け入れる雑多な形態のことにすぎないからである。「革命的」という言葉は骨抜きにされ、宣伝文句に使われて、たえず変更を加えられる商品生産の細部の、ごくわずかな変化を言い表すまでに成り下がっている。それは、望ましい核心的変化の可能性は、もはやどこにも示されていないからにほかならない。現代では、革命の企画は歴史の法廷の前に被告として出頭させられ、失敗に終わったこと、新たな疎外をもたらしたことを非難されている。このことが示すことは、革命家たちの予測以上に、現実のあらゆるレベルで、支配的な社会が自らを巧みに防衛することができたということであって、支配的な社会が受け入れられやすくなったということではない。革命を、再発明せねばならない。ただそれだけのことである。

このことは、一連の問題を提起するが、それらの問題は、近い将来、理論的にも実践的にも解決せねばならないだろう。ここでは、早急に意見の一致を見ることが必要な、いくつかの点を簡単に指摘しておこう。

ヨーロッパの労働運動のさまざまな少数勢力の間では、近年、再編成の傾向が顕著だが、ここ

で考慮に値するのは、まず何より、今日、＜労働者評議会＞の合い言葉を掲げて結集している、最もラディカルな潮流だけである。ここで、単に人心を攪乱するにすぎない分子が、この対決のなかに入り込もうとしていること（これについては、さまざまな国の「左翼の」哲学・社会学系の雑誌の間で最近結ばれた協定を参照のこと）を見落としてはならない。

新しいタイプの革命組織を作り出そうとするグループが出会う最大の困難は、そのような組織の内部に新しい人間関係を築かねばならないという点にある。確かに、このような試みに対しては、いたる所に存在する社会的な圧力がかかる。だが、なんらかの方法——いまだ実験段階にしかないのだが——によって、これを達成しないことには、専門化した政治から脱することはできない。また全員参加の要求も、真に新しい組織、さらには、真に新しい社会を運営するために必要不可欠な要求であることをやめ、抽象的で道徳的な願望の類に墮してしまふ。活動家は、組織の指導者たちによる決定事項の単なる実行者になってしまうか、さもなければ、自分たちの仲間のうち専門分野と見なされた政治に最適の者の仕事を見守る観客の役割にまで追いやられてしまふ危険がある。これでは、古い世界の受動性の関係を再現することになってしまう。

人々の参加と創造性は、生活体験の全側面に明確に関与する集団的計画に依拠している。それはまた、生の構築のさまざまな可能性と現在の悲惨なあり様との、すさまじい対照を示すことによって、「民衆を激怒させる」ための唯一の手段でもある。日常生活の批判がなくては、革命組織は、現代の余暇の専門化された場であるあの休暇村と同じくらい型にはまった、結局のところ受動的な、分離された空間になってしまう。パリニュロ*1を研究したアンリ・レイモン*2のような社会学者たちは、休暇村において、スペクタクルのメカニズムが社会総体の諸関係を遊びという形で再現していることを明らかにした。しかし、彼らは、たとえば「他人との接触の多さ」を無邪気に喜んだだけで、それが単なる数量的な増加にすぎず、そうした接触が他のどこでもそうであるように平板で内実のないことを見抜けなかった。最も反ヒエラルキー的で絶対自由主義的な革命集団においてさえ、人々間のコミュニケーションは一般的な政治綱領によって何ら保証されていない。社会学者たちは通常、日常生活の改良主義に賛同していて、日常生活の埋め合わせを休暇の間につけることを推奨している。しかし、革命の企図は、空間や時間や質的な深みの点で制限された遊びという古典的観念を受け入れることはできない。革命的遊びである生の創造は、過去の遊びのすべての記憶に対立する。「地中海クラブ」*3の休暇村は、仕事をしている49週の間生活と正反対のことをするために、安っぽいポリネシア風のイデオロギーをよりどころにする。それは、ちょうどフランス革命が共和政ローマの見せかけの下で起こったのとどこか似ている。あるいは、今日の革命家が、ボルシェヴィキ・スタイルであれ他のスタイルであれ、活動家の役割を自分たちが担っていると自分でまず思い込み、自らをそのように定義するのと似たところがある。だが、日常生活の革命は、その詩を過去からではなく、もっぱら未来から引き出さねばならないのだ。

まさに、余暇時間の拡大というマルクス主義的観念に対する批判は、当然ながら、現代資本主義の空虚な余暇の経験によって正當にも修正される。確かに、時間の完全な自由にはまず、今まで存在して来た強制労働とはあらゆる点で異なる目的と条件において、労働を変革し、その労働を自分のものにする必要がある（フランスで『社会主義か野蛮か』*4を発行しているグループ、イギリスで『労働者の権力のための連帯』を発行しているグループ、ベルギーで『アルテルナテ

ィヴ』を発行しているグループの活動を参照のこと)。だが、これに基づいて、労働そのものを変え、合理化し、それに人々の関心を向けさせることにのみ力点を置くと、生活の自由な内容（言い換えれば、古典的な労働時間——これ自体も変更されるのだが——の枠を越えて、さらに休息や娯楽のための時間の枠を越えて発展させねばならない、物質力をともなった創造力）という考えを無視して、事実上、いまある生産の協調、より高い生産性を擁護することになりかねない。生産の体験それ自体を問題にすることや、この生活が必然的なものかどうかを問題とすることは、異議申し立ての最も基本的なレベルにおいてさえ等閑視されてしまう。個人生活のあらゆる空間・時間を自由に構築することは、将来、社会を改善しようとする経営者候補が持つあらゆる種類の協調の夢から守り抜かなければならない要求である。

今までシチュアシオニストが行なってきた活動のさまざまな契機は、単に文化的であるのみならず、社会的でもある革命の新たな出現という見地からしか理解されえない。そして、そのような革命の適用範囲はたちまち、これまでの革命のどんな試みのときよりも、広大になるにちがいない。それゆえ、S I [シチュアシオニスト・インターナショナル]には信奉者や支持者を募る必要はない。ただ、近い将来、レットルに関係なく、あらゆる手段を使ってこの仕事に尽力することができる人々を集めるだけだ。ついでに言えば、これが意味することは、専門化された芸術的行為の残滓同様、専門化された政治の残滓をも拒否せねばならないこと、特に、この分野において多くの知識人に特有のポスト・キリスト教的マゾヒズムは断固拒絶せねばならないということである。われわれだけで、新たな革命のプログラムを展開しようというのではない。われわれが言いたいのは、形成途上のこのプログラムが、いつの日にか、実践によって、支配的な現実に対して異議を申し立て、その時には、われわれもその異議申し立ての運動に参加するするのだということである。個人としてわれわれがどうなろうと、新たな革命運動は、われわれが共に追求してきたこと——それは、制限された永久革命という古い理論から、一般化された永久革命の理論への移行と言い表すことができよう——を考慮に入れずにはなされないだろう

*1：パリニューロ 地中海クラブのヴァカンス村の1つが置かれた地名と思われるが不詳

*2：アンリ・レイモン フランスの社会学者。モラン、ルフェーヴルらの『アルギュマン』誌に協力し、同誌 第17号（1960年）には「余暇の官僚主義化」という論文を発表している

*3：「地中海クラブ」 1949年創立のフランスの会員制リゾートクラブ。会員77万人を擁し、フランス本国とタヒチやアンチール諸島などの海外県・海外領土に100近くのリゾート村を開設する

*4：『社会主義か野蛮か』 コルネリウス・カストリアディス（1922-）がトロツキズム運動（「第4インター・フランス支部」）と袂を分かった後に、クロード・ルフォールらとともに結成した同名のグループ（1949-65年）の機関誌。

訳者解題

初期のシチュアシオニストの都市計画への関わりは、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第1号に掲載されたジル・イヴァンの文章「新しい都市計画のための理論定式」やコンスタントの唱えた都市計画「ニュー・バビロン」（本書 第1巻「もう1つの生活のためのもう1つの都市」、第2巻「黄色地帯の描写」参照）に見られるように、ある意味では、ポジティブでユートピア的とも言える側面を持っていた。ところが、ここに収められた論説「都市計画の批判」と後の「統一的都市計画事務局の基本綱領」では、都市計画そのものを批判し、それと同時にコンスタントのような実験都市の建設を断罪する。これらの論説のトーンには、かつてのものとは異なり、実験都市の建設によって状況を構築するという方針を捨て去ったかのような感さえある。このシチュアシオニストの方向転換には、単に体制派の建築家と協力したために脱退を強いられたコンスタントの逸脱的行動に対してシチュアシオニスト内部で原則を再確認する必要が出てきたという理由だけでなく、60年代のフランスで体制側の都市計画が異様な速度で進展し始めたという事情も大きく影響しているように思われる。高度資本主義の時代に入った60年代のフランスでは、より効率的な労働力の移動を求める産業資本の要請あるいは生活の全局面においての住民統合をめざす国家的要請によって、工業地域の周辺に次々と新しいニュータウンが建設されはじめた。この論文で触れられているサルセルやムーランなどは、そうしたニュータウンのはしりであるが、現実の都市計画が個別の実験としてではなく、社会全体を巻き込む勢いで実行されるようになってきたこの時期に、彼らは、「都市計画」そのものを他の社会批判の活動と分離して追求することの限界をいっそう強く感じ始めたのだと思われる。資本や国家の側が主導権を取ってニュータウンという「実験都市」を次々に作り始め、スペクタクル化された都市生活のイメージを社会全体に拡大し始めた段階において、コンスタントのような「実験都市」の創造という限られた形での統一的都市計画の実現はもはや不可能である。「実験都市」の創造という考えそのものが、新しい都市を作り出すという意味での「都市計画」のイデオロギーに荷担してしまうからである。むしろ、社会全体に浸透したそのイデオロギーを解体することが急務である。「統一的都市計画」は、どこにもない国、どこにもない場所としての「ユートピア」を求める「都市計画」ではない。それは、あらゆる国、あらゆる場所で行われる「生の新しい利用」、「新しい革命的実践」であり、現実の都市を離れずに、「人類の持つ既存の手段を用いて、人生を——その手はじめに都市環境を——自由に構築する」全体的な実践なのである。

以前からシチュアシオニストは「統一的都市計画とは都市計画上の1学説ではなく、都市計画の批判である」（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第3号〔1950年代末の都

市計画])と言ってきた。現行の専門化された都市計画の修正として考案された、より現代的で進歩主義的な都市計画の案は誤りである。それはたとえば、革命の企図において、権力奪取の瞬間を過大評価することが誤りであるのと同じくらいの誤りである。この過大評価は専門家にありがちな考えであり、それは、分割することのできない人間活動の総体があらゆる瞬間に提起する革命的任務をすべてたちまち忘却させるばかりか、それを抑圧しさえするのである。都市計画は、一般化された革命的実践（プラクシス）と融合していなければ、必然的に、現代の都市生活のあらゆる可能性に対する第1の敵となる。それは、1つのまとまりのある全体性を代表すると自称する社会勢力の断片の1つであり、断片の全体を説明し組織するものとして勢力を広げようとするが、それが実際に行っていることは、それらの断片を生み出し、その断片によって維持されている現実社会全体を隠蔽することにほかならない。

このような都市計画の専門化を受け入れることは、とりもなおさず、「実践的で」実現可能な多種多様な都市計画の1つを実現するために国家が作り出した都市計画上の欺瞞や現存する社会の欺瞞に奉仕することである。だが、われわれにとって唯一実践的な都市計画、すなわち、われわれが統一的都市計画と呼ぶものは、それによって放棄されることになる。というのも、統一的都市計画を実現するには、今とはまったく違う生の条件を創造しなければならないからである。

6ヶ月ないし8ヵ月ほど前から、主に西ドイツの建築家や資本家の手を借りて、少なくともルール地方だけでも、いますぐ「統一的都市計画」を開始しようという多くの策謀が見られてきた。事情に疎いにもかかわらず早急な実現に目が眩んだ商人たちは、2月には、エッセン*1にUU [=統一的都市計画]の実験室を近く開設する（ファン・デ・ロー画廊*2を改築して）と発表できるとさえ思った。彼らが、不承不承、それを公に否認したのは、われわれがそんなものは握造だと暴露すると脅したからである。元シチュアシオニストのコンスタント*3は——彼のオランダの仲間は教会の建築を引き受けたかどで、S Iから除名された——、ポーフム市立美術館*4が3月に編集した彼の作品目録のなかで、今や、何と工場の模型を提案している。この抜け目ない男は、2、3のシチュアシオニストのアイデアをよく理解もせずに盗用しながら、大衆を資本主義的「技術文明のなかに同化させるための広報係になろうと臆面もなく申し出ているのである。そればかりか、都市環境を一変させる彼の計画をすべて放棄してしまったとS Iを非難する。それに取り組み続けているのは自分だけだというのだ。このような条件下でできるのは、本当に彼だけだろう！ それに、1959年4月に、「革命的知識人および芸術家へのアピール」の採択に断固として反対したのが、この同じS Iのオランダ・セクションのかつてのメンバーの者たちだったことを思い出しておくのも無駄ではない。彼らは「われわれにとって、このような展望は、『革命によって現在の社会を転覆するか否か』にかかっているわけではなく、その転覆の諸条件は不在なのだ」と主張したのだ（この論争については『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第3号23—24ページ『革命的知識人および芸術家へのアピールについての議論』を参照のこと）。したがって、彼らは自らの道を論理的にたどったのである。さらに不思議なのは、何人かのシチュアシオニストを惑わして、この種の企てに巻き込もうとする輩がなおもいることだ。栄光への関心とか金儲けの誘惑に賭けようとも思っているのだろうか。ポーフムの美術館長が手紙でブリュッセルの統一的都市計画研究所に共同作業を申し出てきたのに対して、アッティラ・コターニィ*5は4月15日に次のように回答した。「あなたがオリジナルのこと

をある程度ご存じなら、われわれの批判的な観点を、同じラベルの貼られたコピーの下に隠れている体制を擁護する観点と混同するようなことはできないと思います」。そして、議論するつもりはまったくないと、はねつけた。

UUに関するシチュアシオニストのテーゼのオリジナル版を知ること自体が容易いことではない。6月に、ドイツの同志たちは彼らの雑誌の特別号（『シュプール』誌*6第5号）を発行したが、そこには、SIやその結成を準備した潮流の手になるUUに関するここ数年の文章が集められた。それらの文章は、多くが未刊であったり、今では手に入らない出版物に発表されたもので、いずれにせよ、ドイツ語で出版されたことがこれまでなかったものである。ドイツにおいて、これらの文章の出版を妨害したり、少なくとも改竄しようとしたりするために、どのような圧力がシチュアシオニストに対してかけられているかがすぐさま確認された。それは、印刷所に対する3週間の印刷停止処分に始まって、不道德、狸褻文書、冒瀆、暴動の扇動のかどで訴えるというばかげた脅迫にまで及んだ。ドイツのシチュアシオニストたちは、もちろん、このようなさまざまな威嚇の試みには耳を貸さなかった。したがって、現在、ルール地方の保守的な統一都市計画のプロモーターらは、自分たちの活動を始めるのに、このラベルが利益になるのかどうか自問し始めたに違いない。

人間の活動のどの側面についても言えることだが、都市の領域においても、現存の社会全体に対して異議を申し立てることが、真の解放の唯一の基準である。言い換えれば、「改良」とか「進歩」といったものは常に、結局は体制を円滑に動かし、大衆操作を完全なものにするためであるのであり、われわれが、都市計画を始めとするあらゆるところで打倒せねばならないのは、この大衆操作なのである。『フランス社会学雑誌』第3号（1961年7-9月号）のなかで、アンリ・ルフェーブル*7は、『新しい国家、フルト溪谷のための一研究』をチューリッヒで発表したばかりの建築家と社会学者のグループに対して、その計画の数多くの不十分さを批判している。しかし、われわれが見るところ、この批判は、まさに、社会的枠組みのなかでこの専門家のグループ——彼らは、社会的枠組みが要請するさまざまなばかげたことを、議論もせずに入れている——が演じている役割自体をはっきりと問題にしなかった点で、十分ではない。したがって、ルフェーブルの論文は、やはりなおこの研究の価値を認めすぎているのである。確かにこの研究には、それなりの効用や価値があるかもしれないが、それはわれわれの観点とは根本的に敵対する観点から見てのことである。この論文のタイトル『実験的ユートピア——新しい都市計画のために』自体が曖昧さをそっくり含んでいる。というのは、実験的ユートピアの方法は、その計画に本当にふさわしいものであるためには、明らかに全体性を包含しなければならないからだ。つまり、その方法の適用は、「新しい都市計画」に至るのではなく、生活の新しい利用、新しい革命的実践（プラクシス）に至らねばならない。SIのドイツ・セクションの雑誌の同じ号〔『シュプール』誌 第5号〕に発表されたフォイエルシュタイン*8のテーゼの弱点もまた、建築を情動の面で転覆する計画が、社会全体のレベルで見られる建築以外のかたちでの大衆操作やその拒否に関連づけられていないところにある。それでも、いくつかの点は興味深く、特に、「偶然の表象であると同時に一つの出来事を含み持つ事物（オブジェ）の最小組織」である不安定な街区（ブロック）という概念は興味深い。「偶然的な建築」に関するフォイエルシュタインの考えは、SIの方針と合致しているが、それが、そのすべての帰結において理解され、実現

されるには、建築という他から分離された問題と、その問題に対して充てられがちな抽象的な解決策が乗り越えられねばならない。

現在すでに、都市計画の危機は具体的な社会的政治的危機であるだけになおさらそうである。たとえ、今日、伝統的な政治から生まれた勢力はみな、もはや、この問題に介入する能力がないにせよ、そうなのだ。「団地の病理学」に関する月並みな医学・社会学的言葉とか、そこで生活せねばならない人々の情緒的孤立とか、主に青少年におけるある種の極端な拒絶反応の蔓延といったものは、ただ単に、現代の資本主義や官僚的な消費社会が、ほぼいたるところで自らの舞台装置を造形し始めているという事実を示しているにすぎない。この社会は、ニュータウンを開発することによって、自らを正確に表象する場所、その順調な運営に最も適当な諸条件を兼ね備えた場所を作り出す。同時に、社会は、空間のなか、すなわち日常生活の組織化を明確に表現するもののなかに、疎外と強制というその基本的原理を明らかにする。したがって、そこにはまた、社会の危機の新たな局面も、この上なくはっきりと現れてくるだろう。

4月にパリで開かれた「明日のパリ」と題された都市計画博覧会では、実際、パリ郊外の、すでに出来上がった団地や計画中の団地を擁護するものが展示されていた。パリの将来は、まったくパリの外ということになるだろう。展示の教育的な順路の最初の部分は、有無を言わせぬ統計の結果を用いて、人々（主に労働者）に、パリは、他のどの国の首都よりも不衛生で住みにくいことを納得させようとしていた。したがって、彼らはよそに引っ越さなければならないわけだが、ちょうどいい具合に、うまい解決策が提案されていた。ただこうした再編成地域の建設に対して、今どれだけの金を支払わなければならないかということは明らかにはされていない。たとえば、こうした団地のマンションの購入は、何年間の経済的隷属の強化に相当するかとか、こうして獲得された不動産は都市計画に従ったどんな終身禁固生活を体現しているかという問題である。

しかしながら、こうしたいんちきな宣伝が必要なこと自体、また、行政が絶対の権限をもって決定した後で、関係者にこのような説明をする必要があったということ自体が、大衆の初歩的な抵抗の存在を暴露している。この抵抗は、現代資本主義のあらゆる条件を認識しそれと闘うことを実際に決心した革命的組織によって、全面的に支持され、解明されなければならない。社会的調査——その最も致命的な欠陥は手持ちの貧弱な選択肢のなかからしか選択できないことだが——によれば、団地に住む住民の75パーセントが庭付きの一戸建住宅を持つことを夢見ているという。

古い意味における不動産という、あの欺瞞的なイメージのせいで、たとえば、ルノーの労働者たちは、6月に、突然に降りかかってきたクラマール*9の一地区全体の小さな家を買わされたのである。今やますます全体主義的になりつつある社会の居住条件は現実において置き換えられるであろうが、それは、資本主義の古い段階のこうした時代遅れのイデオロギーへの回帰によるのではなく、万人のなかにある、今は抑圧されている構築〔＝建築〕の本能を解放することによってなされねばならない。この解放は、真の生活の獲得のための他のすべての側面の解放なしにはなしえない。

芸術や都市計画に関しても政治に関しても、今日の進歩主義的な研究における議論は、あらゆる

る工業国に起きている現実、つまり、生活の強制収容所的組織化という現実に比べて大きく遅れをとっている。

サルセル*10のような郊外で、あるいは、より明確なかたちでは、ムーラン*11（この町は、住民全員がラック*12の石油化学コンビナートに雇用されることによって成り立っている）のような町で労働者に対して行使される大衆操作の水準の高さは、革命運動が、将来、現代の真の危機、真の要求のレベルで自らを再編成することができた時に、あらゆる場所でどのような条件下で闘わねばならないかを、今からすでに教えてくれている。ブラジリアの機能主義建築が示しているのは、機能的（フオンクシヨネル）な建築とは、完全に発達させれば、役人（フオンクシヨネール）の建築、官僚的な世界観（ヴェルタンショーウルク）の道具となりその小宇宙となってしまうということである。ここで確認すべきは、官僚的で計画経済的な資本主義がすでにその舞台装置を構築したところでは、大衆操作が完成の極にあり、個人の選択の余地は非常に狭められているので、宣伝という——より無秩序な競争の段階に対応していた——大衆操作に不可欠な慣行でさえ、そのほとんどの形態と媒体において消え去る傾向にあるということである。都市計画には、あらゆる古い宣伝を都市計画という唯一の宣伝に融合することができる、とも考えられる。残りは付録として手に入る。そしてまたおそらく、そうした状況においては、20世紀前半にあれほど激しかった政治的宣伝は、ほとんど完全に消滅し、あらゆる政治的問題に対する条件反射的な反感に取って代わられるだろう。革命運動は、問題を万人の軽蔑のまどである従来の政治領域から遠くに移さねばならない。同様に、既成権力は消費財のスペクタクルの単純な組織化に今よりもずっと頼るようになる。消費財は、幻想のなかでまずスペクタクルの対象にならない限り、消費価値を持たなくなる。サルセルやムーランでは、こうした新世界の劇場がすでに試験的実施されている。それは、個々のテレビ受像機のまわり、極限まで細分化されていながら、しかし同時に、正確に都市と同じ規模にまで広がっているのである。

統一都市計画というものが、われわれの考えるように、人類に持つ現存の手段を用いて、人生を——その手はじめに都市環境を——自由に構築することだと仮定するなら、ただ単に、都市の創造やそれに結びついた行動に関する理論や実践が他所にはまったくないからという理由だけで、われわれに、統一的都市計画がどの程度実現可能で具体的なものなのかとか、どれだけ実用的でどの程度までコンクリートに刻み込まれているのかとか尋ねにくる者たちとの議論を受け入れるのはまったく無駄というものである。統一的都市計画の理論が要求する環境の構築という意味で、「都市計画」を行っているものは一人もいない。存在するのは、人々を統合する諸々の技術（これらの技術は実際に利害の衝突を解消するが、その結果、今は目立たないがより重大になってくる衝突を生み出さずにはいない）の総体にすぎない。こうした技術は、馬鹿どもによって無邪気に、あるいは警察によって意図的に用いられている。都市計画に関する言説はすべて嘘である。それは都市計画によって計画的に組織された空間が社会的虚偽の空間、強化された搾取の空間にほかならないのと同じくらい明白である。都市計画の持つ力について述べる者は、自分たちが権力の都市計画を実行しているのにほかならないことを忘れさせようと努める。民衆の教育者として現れる都市計画家は、自ら教育されるべきだったのだ。彼らが力のかぎり再生産し、完成させようとしているこの疎外の世界によって。

都市計画家の駄言において、人を魅了する中心街（センター）という概念は、現実の対極に

ある。それは、参加という社会学的概念がそうであるのとまったく同じである。というのも、これらの学問は、参加が「参加することの不可能な何か」（『基本綱領』の第2点）にしか向けられない社会に満足しているからである。この社会は魅力のない物体への欲求を人々に押し付けねばならず、いかなる形態においても真の魅力を容認することはできないのだ。社会学が決して理解できないことを理解するには、社会学にとって中立的であるものを有害という観点から考察するだけで足りる。

S Iの統一的都市計画綱領の言う、実験的生活のために整備された「基地」とは、建物であると同時に、今われわれが入りつつある歴史的時代において、すでに日程に上っているとわれわれの信じる新しいタイプの革命組織の常設の施設である。これらの基地が存在したあかつきには、それはまさに体制を転覆するものとなるだろう。未来の革命組織は、これより不完全な手段を頼みとすることはできないだろう。

*1：エッセン ルール地方、ボンの北部、ライン川沿いの産業都市。1960年代にエレクトロニクス産業が発達した。

*2：ファン・デ・ロー画廊 オットー・ファン・デ・ローが設立したオランダの画廊。アスガー・ヨルン、コンスタントラ旧コブラのメンバーの展覧会を催したり、彼らの画集や書物を多く出版している。

*3：コンスタント（本名コンスタント・アントン・ニューヴェンホイス 1920-） オランダの画家・彫刻家。〈オランダ実験グループ〉、コブラの活動を中心的に行った後、1957年からシチュアシオニスト・インターナショナルに参加。コブラの活動後、10年近く絵画製作をやめ、「ニュー・バビロン」と名付けた都市計画のマケットを作り続ける。1960年夏、脱退。

*4：ボーフム市立美術館 ボーフムはドイツ中西部のルール地方の鉱工業都市。人口約40万。市域内に炭鉱を持ち、鉄鋼、機械、化学、自動車（オペル）などの重工業が発達。ヨーロッパ最初の鉱山学校が開設され、地下に実物そのままの坑道を持つ鉱山博物館があることで知られる。

*5：アッティラ・コターニイ ハンガリー国籍のシチュアシオニスト。S Iベルギー・セクションに所属して活動。1963年10月、ヨルゲン・ナッシュを擁護したことを理由にS Iを除名。

*6：『シュプール』誌 1957年、西ドイツ、ミュンヘンで結成されたアヴァンギャルド芸術集団〈シュプール〉の機関誌。〈シュプール〉は、1955年始めにS I合流し、1960年8月から62年1月にS Iから集団除名されるまで、機関紙『シュプール』全7号を刊行した。ここで触れられている『シュプール』第5号（1961年6月）は「統一的都市計画特集号」で、シチュアシオニストとその前身のレトリスト・インターナショナル、〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動〉が1953年から1960年までに発表した統一的都市計画に関する文章の翻訳を掲載している。

*7：アンリ・ルフェーブル（1901-91年） フランスの社会学者。1930年代にマルクス主義に接近し、58年にフランス共産党を除名されるまで、党の理論家の1人として活動。高度資本主義社会の日常生活を社会的に研究し、正統派マルクス主義の変更を迫る大著『日常生活批判』（第1部、1958年、第2部、61年。その『序説』は1947年に発表）や、スターリン主義を告発した『マルクス主義の当面の諸問題』（58年）により、左翼・知識

人から芸術家までに大きな影響を与えた。1960年以降、シチュアシオニストの影響下に「都市」を拠点とした「革命」の考えに傾斜してゆき、『パリ・コミューン』（65年）、『都市への権利』（68年）、『都市革命』（70年）など多くの都市論を著し、現代に至るまで都市計画専門家に影響を与えている。

*8: ギュンター・フォイエルシュタイン（1925?-） ウィーンの建築家で『シュプール』第5号に論文「偶然的な建築に関するテーゼ」を掲載した。

*9: クラマール パリの南に位置する郊外の住宅地。人口約5万3千。

*10: サルセル パリの北の郊外の町。1958年から1961年にかけて、パリ周辺では初めての大規模な団地が建設されたが、多くの批判を巻き起こし、問題のあるベッド・タウンのシンボルとなった。

*11: ムーラン 1950年代に、ラックの天然ガス発見によって作られた人口1万人ほどのニュータウン。1万2千人の住民のうち、既婚者は中層集団住宅に、独身者は高層ビルに住んでいる。写真の右側には、中間管理職の住む小さな地区が広がっているが、そこにはどれも同じ形の戸建住宅が並び、それぞれの住宅には2家族が左右対称の形で住んでいる。その向こうは、より高収入の管理職が住む地区で、そこには、住人に完全に帰属する別の型の戸建住宅が並んでいる。ラックで行われている労働を実際に支配する管理職たちは、ポーやトゥルーズやパリに住んでいる。

*12: ラック ピレネー＝アトランティック地方のポー渓谷に位置する町。1951年に天然ガスと油田が発見され、その精製にともなう副産物を利用した化学工業が発達した。天然ガスはパイプラインでフランス全土に送られるほか、近隣の発電所やアルミ精練所などでも利用される。

訳者解題

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第2号の「論説」の1つに掲げられた「不在とその飾り立て役」)に続き、シチュアシオニストはここでふたたび自らが「解体」派と呼ぶ前衛芸術家らを批判する。しかし、前回の批判と今回の批判とでは、その批判の対象と水準が微妙に異なっている。前回、批判の対象となったのは、ジョン・ケージの「無音」の音楽やクラインの「モノクローム絵画」、ミシェル・タピエ、ジョルジュ・マチュー、シモン・ハンタイらのアンフォルメル絵画だったが、その批判の主眼は、これらの芸術表現に共通の特徴である「不在」あるいは「空虚」が、シチュアシオニストのかつて用いた方法、たとえばドゥボールの映画『サドのための叫び』の「空虚」と「沈黙」のスクリーンなどを模倣したものであるにもかかわらず、その意図がまったく別の所にあることを問題としていた。すなわち、ケージやクラインは、その「沈黙」や「空虚」を「宗教」という「スペクタクル」によって埋め——ケージは仏教によって、クラインは薔薇十字団という秘教によって——、タピエやマチュー、ハンタイは王党派ファシズムの教義に突き動かされてアンフォルメルの絵画制作を儀式化するが、それらはみな、「空虚」によって「スペクタクルの社会」を反転するドゥボールの行為とは正反対の発想から生じたものである。シチュアシオニストは、「現代芸術」を標榜する者たちの前衛的と称する表現がそのような保守的なイデオロギーに裏打ちされ、「宗教」の装飾になり果てていることを暴露し、その彼らの倫理あるいは思想を問題としていたのである。

今回、シチュアシオニストが批判の標的とするものは、主として、前回批判したクラインとティンゲリーの周辺にその後形成された〈ヌーヴォー・リアリスト〉のグループと、60年代になって出現してきたニコラ・シェフェールらのエレクトロニクス的なあるいはサイバネティクス的な〈環境芸術〉であるが、ここでのシチュアシオニストの批判は、彼らの倫理や思想を問題とするよりはむしろ、彼らの表現の手法そのものを問題にするやり方へとより深化している。日常生活のなかに見い出される事物——廃物・ポスター・機械・商品な——どを、芸術表現の道具としてそのままのかたちで用いて、現代消費社会の「新しいリアリズム」を実践し、ポップ・アートのフランスでの先駆けとなった〈ヌーヴォー・リアリスト〉たちの手法は、現代の「スペクタクルの社会」においては、現実の政治や消費生活の「スペクタクル」の支離滅裂さに太刀打ちできない。ヌーヴォー・リアリストの芸術は、大量消費社会のモノの氾濫と「あらゆる既存の語彙、あらゆる言語、あらゆるスタイルの枯渇と硬直化」という状況のなかで、「現実に対する新しい知覚的アプローチ」（1960年4月にミラノのアポリネール画廊で開催されたイヴ・クライン、アルマン、フランソワ・デュフレヌ、レーモン・アンス、ジャン・ティンゲリー、ヴィレグレの集団展のためにピエール・レスタニーが書いたパンフレット『ヌーヴォー・リアリスト』のなかの表現）を追求する運動であると主張するが、それはシチュアシオニストのように「新しい現実」を「構築」するものではなく、単に既存の現実に対する受動的な表現にとどまるがゆえに、たちまちこの現実には追い抜かれてしまったのである。ヌーヴォー・リアリストの芸術表現はそ

れでもまだ、この大量消費社会への批判意識を伴ったものであったが、エレクトロニクスとサイバネティクスのシステムに全面的に依拠して都市の余暇のためのショーを提供しようとするニコラ・シェフェールなどの〈環境芸術〉は、体制批判どころか現代消費社会を全面的に賛美する体制派の芸術である。シチュアシオニストは、スペクタクルの社会がその観客に提供する相互補完的な芸術として、これら2つの潮流ともに批判するのである。

文化の生産はとこまで進んだか？ 過去12ヵ月の間に起こった現象を、S Iが数年前に行った解体の分析（「不在とその飾り立て役」『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 第2号 1958年12月を参照のこと）に突き合わせてみると、われわれの予測はすべて正しかったことが確認される。メキシコでは、昨年、マックス・オーブ*1が、架空の立体派（キュビスト）画家カンパランスの一生に関する分厚い本を書いたが、その際、自分の称賛の正当性を証明するために、何枚かの絵の助けを借りたところ、たちまちそれらの絵は重要な絵だということになった。1月には、ミュンヘンで、マックス・シュトラックに率いられた画家たちが、夭折した——やはり架空の——若い若いタシズムの画家ボルス・クリムの、おあつらえ向きに感傷的な伝記と同時に、彼の全作品の展覧会をでっちあげた。ドイツのテレビとジャーナリズム——ほとんどすべての週刊誌——は、かくも典型的なこの天才に熱狂し、まやかしだという声明まで発表され、そのため、偽作者に対する訴訟を要求する者まで出る始末だった。『パリ・プレス』誌のバレエ批評家は、1960年11月に、ドイツ人ハリー・クラマー*2の『夜の果て』について次のように書いている。「わたしはもうすべてを見尽くしたと思っていた。テーマのないバレエや衣装のないバレエ、大道具のないバレエに音楽のないバレエ、こうした要素がいっさいないバレエさえも見たことがある。だが、わたしは間違っていた。昨晚、わたしは、これまで見たことのないもの、予想もしなかったもの、想像もできなかったものを見た。振り付けのないバレエである。つまり、振り付けの試みがこれっぽっちもないバレエ、動かないバレエである」。それから、同年9月28日付けの『イヴニング・スタンダード』紙は、「芸術とゴミの間には実際何の違いもないこと」を、自らの理論によっても、実践によっても証明しようとするトロントの画家ジェリー・ブラウンを世界に知らしめる。パリではこの春、1軒の新しい画廊がこのトロント存在論的な美学に立脚して、ダダを「40度高熱で」やり直そうと決意した9人の「ニューヴォー・リアリスト」*3のクリエイターの集めたゴミを展示した。しかしながら、彼らは、いささか程度の低い、もったいぶった解説者の手になる、あまりに読みやすい弁明を準備するという過ちを犯した。なぜなら、彼は、愚かにも「感動と感情と、最後にその上、詩情」を再発見するために、社会学までも「意識と偶然の款済」に呼び出しながら、彼らに〈世界〉を〈絵画〉として考えさせることしかできなかったのだから。その通りだ。ニキ・ド・サン＝ファール*4は幸運にも、カービン銃で絵具を塗られた標的—絵画でずっと遠くまで行った。ルーヴル宮の中庭では、1月に、ガッリツィオ*5の弟子のロシア人が、長さ70メートルの絵巻物を制作した。この絵は、

分割して販売することができる。しかし、彼は、マチュー*6の教えに従って、話をおもしろくした。というのも、彼はそれをたった25分で描きあげたのだ、しかも自分の足で。

最近、その流行が確認されているアントニオーニ*7は、1960年10月に雑誌『シネマ60』で次のように説明している。「ここ数年、われわれは感情を可能な限り検討し、調査してきた。探求し尽くすまでに。われわれにできたのは、それが精一杯だった。(……)しかし、われわれには、新しい感情を見つけ出すこともできなかつたし、この問題の解決策を垣間見ることすらできなかつた。(……)何よりも言いたいことは、技術やありきたりの手段はすべて使い尽くされたという否定的な事実から出発せざるをえないということだ」。他の文化的手段や新しい参加の形態を探さねばならないのか？ 3月以来、ニューヨークの地下鉄の通路には、特別なポスターが貼られている。それは乱暴者(ヴァンダル)に書き殴られるためだけに存在する。少なくとも今夏以来、エレクトロニクスのギャング団は、リエージュで、お馴染みニコラ・シェフェール*8の「〈形〉と〈光〉のスペクタクル」のために52メートルの高さの空間力学の塔を提供している。彼は今回、お似合いの音楽を付けて、1500平方メートルの巨大なスクリーンにカラーの抽象的大壁面を投影するために「70台の光の攪拌器」を使う予定でいる。この素敵な努力は、彼が期待するように「都会の生活に」うまく調和するだろうか？ それを知るには、ベルギーでの次のストライキを待たなければならない。というのは、この前、リエージュの労働者たちが自らの考えを示す機会を得たとき、1月6日に、このシェフェール・タワーはまだ存在せず、彼らは『ラ・ムーズ』新聞社の設備を破壊しにいったのだから。

ティンゲリー*9は、彼よりもましな着想を得て、ニューヨークの現代美術館で、自らを破壊するように巧みに配された機械が実際に動いているところを見せた。しかしながら、厳密に何の役にも立たないことを目的にした「無用の機械」の原型を今から数年前に作り上げたのは、リチャード・グロッサーというアメリカ人だった。「それはアルミニウムでできていて、形は小さく、でたらめに点いたり消えたりするネオン管が何本もある」。グロッサーはこれを500以上売った。その内の1つはジョン・フォスター・ダレス*10が買ったらしい。

確かに、こうした発明家たちはみな、いくらかユーモアを持ちあわせている時でも、大騒ぎして、自分たちが、芸術を破壊したり、1つの文化全体を擬音語や沈黙に還元したりする発見を行ったかのように振る舞う。まるで、未知の現象、自分たちだけを待っていてくれた新思考を発明したかのようなのだ。だが、彼らはみな、文化の無人地帯で掘り出した死休をもう1度殺しているにすぎない。その無人地帯の向こうに何かあるか考えてみようともせずに。それにもかかわらず、彼らはまさしく今日の芸術家なのである——どうしてそうなのかは自覚していないだろうが。彼らは、古いがらくたが新品であると厳かに主張される現代という時代を正しく表現しているのである。この計画化された支離滅裂さの時代。マス・コミュニケーションの手段によって保証された孤立と難聴の時代。文盲の高度形態である大学教育の時代。科学によって保証された嘘の時代。指導者の愚鈍さへの傾向を決定づける技術力の時代。彼らが不可解なままに表現する不可解な歴史は、血塗れでありながら滑稽な地球的規模の見せ物(スペクタクル)である。この見せ物(スペクタクル)のプログラムには、この多産な6ヵ月の間に次のような題目が演じられた。ケネディは、武装した人民が自発的にそれを受け入れるかどうか調べるために、キューバに警察隊を送った。フランス軍の急襲部隊はクーデタを試みたが、テレビ演説にあって降伏した

。ドゴールはヨーロッパの勢力圏にあるアフリカのある港を再び関かせるために砲艦政策に訴えた。フルシチョフは、今後19年以内に共産主義を大筋において実現すると冷たく言い放った。

こうした古いがらくたはみな関連し合っている。こうした下らぬことはみな、過去のしかじかのかたちの「真面目さ」や優雅な調和といったものへの回帰によっては、乗り越えることができない。この社会はあらゆるレベルにおいて、ますます悲痛なまでに滑稽になってゆくだろう。完全な革命によって構築しなおされる日まで。

*1: マックス・オーブ (1903-70年) スペインの作家。1942年にメキシコに亡命した。多作であった。1958年に、本文で取り上げられている架空の作家の伝記『ジュゼップ・ドレス・カンパラス』を書き、話題になった

*2: ハリー・クラマー (1925-) ドイツの彫刻家・映画監督。第二次大戦後、役者やバレー・ダンサーとして舞台芸術に携わっていたが、1952年の「機械的演劇」と題したマリオネットの製作をとおして彫刻に手を染める。その後、金属や木でできた機械状のオブジェ「自動彫刻」(58年)や運動彫刻、環境芸術作品などを作った。50年代末から60年代にかけて、W・ラムスポットと共同でいくつかの短編映画も作り批評家に評判を呼んだ

*3: 「ヌーヴォー・レアリスト」 1960年4月、ミラノのアポリネール画廊で、美術批評家ピエール・レスタニーが主唱して結成された前衛芸術家集団。当初のメンバーは、レスタニーの他にイヴ・クライン、ティンゲリー、アルマン、デュフレヌ、スペーリ、ヴィルグレ、レイス、アンスら。後に、セザール、ニキ・ド・サン＝ファール、クリストも参加。彩色したスポンジ、圧縮したスクラップ、騒音を発しつつ動く廃品彫刻、梱包作品、壁から剥がした広告ポスターによる作品など、現代の産業社会の生産物や機械をそのまま提示する手法で注目を集めた。62年にクラインが死亡してからは運動は停滞し、63年にはグループは解体した。ここで言及されているのは、61年5月にバリの画廊Jで行われたヌーヴォー・レアリストの第2回展「ダダよりも40度高熱」のことで、そこでレスタニーらが起草した第2回宣言文が発表された。

*4: ニキ・ド・サン＝ファール (1930-) フランスの画家・彫刻家。パリに生まれ、ニューヨークに育つ。精神の病で入っていた療養所での絵画製作治療を契機に画家への道を歩み始め、1951年フランスに戻って「アール・ブリュット」やガウディなどに影響を受けた作品を作る。1960年代初頭にヌーヴォー・レアリストのグループに参加した後、60年代後半には巨体の女性彫刻「ナナ」によって注目を集めた。本文で言われているように、60年頃には、観客にカービン銃を取らせ、絵具の入った小袋が沢山ついたでこぼこの石膏板を撃たせる「びっくり絵画」で名を上げた。

*5: ジュゼッペ・ピノ＝ガッツィオ (1902-64年) イタリアの画家、陶芸家、薬剤師、考古学者、地方議員、ジプシー研究者。1956年、アスガー・ヨルンの「イマジニスト・バウハウスのための国際運動(MIBI)」に参加、アルバに実験工房を開設。翌年、コシオ・ダローシャでのSI設立大会にMIBIのメンバーとして参加、SI設立後は、機械のロールから吐き出される布に絵の具・砂・果汁などを用いて次々と描かれ、その場で切り売りされる工業絵画の製作を中心に、SIイタリア・セクションの中心メンバーとして活動。1960年、SIを除名。

*6: ジョルジュ・マチュー (1921-) フランスの画家。行家の息子として生まれ、高校の英語教師、ユナイテッド・ステイツ・ラインの広報担当を勤めた後、1947年以来、〈叙情的抽象(アブストラクション・リリック)〉を組織、1950年代前半には、アンフォルメル運動の最も目立った画家として活動。50年代末からは世界各地で展

覧会を開く一方で、産業界と行政権力と結び付いた活動（セーヴル陶器、公園・記念碑設計、テレビ放送への協力など）によって「新しいルネッサンス」の旗手とされた。1957年3月、パリのクレベール画廊で、シュルレアリストの画家ハンタイとともにファシスト的教権拡張主義の示威行動を組織するなど、フランス右翼の復活の先頭に立って行動し、またアンフォルメル絵画の公開のアクション・ペインティングに際しては常に黒づくめの服装をしていたことから、「主任司祭」と揶揄されていた。

*7：ミケランジェロ・アントニオーニ（1912-） イタリアの映画監督。いわゆる現代人の孤独、コミュニケーションの不可能性を、ほとんど荒涼とさえ言える、冷たく洗練された作風で描きだし、50年代後半から60年代にかけて、一世を風靡した。代表作に『さすらい』（57年）、『情事』（60年）、『夜』（61年）がある。

*8：ニコラ・シェフェール（1921-） ハンガリー生まれのフランスの彫刻家。1948年に、金属でできた幾何学的形態の支柱に薄い板を取り付けた「空間力学（スパシオダイナミズム）」彫刻を発表した後、音や光の刺激に反応して動くモビール（56年）や、反射板などによって、動く光の効果を楽しむ「光力学（リュノダイナミズム）」（57年）を創作。さらに60年には「時間力学（クロノダイナミズム）」彫刻へと進み、61年にこれらの集大成として、ここで触れられているリエージュの「光の壁」と「光の塔」を完成させたが、これは、テクノロジーとサイバネティクスを全面賛美する内容のものであった。

*9：ジャン・ティンゲリー（1925-91） スイス生まれの彫刻家。廃物彫刻、動く彫刻で知られる、回転レリーフ「メタメカニズム」（54年）や自動デッサン機械「メタマティック」（59年）などを経て、60年、ニューヨーク近代美術館で「ニューヨーク讃歌」という名のイベントを行う。これは、騒音を発しながら動く廃品彫刻で、最後には自らの動きによって自己解体するものであった。

*10：ジョン・フォスター・ダレス（1888-1959年） 米国の政治家、1952年以降、アイゼンハウアー大統領の国務長官として、共産主義の進出を押さえ込むために、いざとなれば、戦争も辞さない覚悟で、いわゆる封じ込め政策を推進し、西側諸国との関係強化に努めた。

若者の危機は、あらゆる現代の国々で、公認の関心事となった。この事実ひとつだけで、どれほどの軽信家も、人々を統合する消費社会の試みに勝運があるとは信じなくなるだろう。若者たちの徒党の形成という極端な事例については、地図上でそれらが「団地」のある場所と対応していることが容易に確認できる。とりわけフランスやイタリアのような比較的遅れた国ではそうである。これらの国では、現代資本主義の生活条件との接触は、これまであまり感じられなかったが、新タイプの居住形態に特有の要因によってこの接触が増えるや否や、それは非常に明白に感じられるようになってきたのである。徒党は「整備された領土」に残された最後の逃げ場所である空地から形成される。そうした空地は、われわ社の統一的都市計画のプログラムが、物理学の「正孔（ホール）」の概念を転用して示した何の用途もない地域を、すべてを欠いた初期段階において、一時的に代理するものだとみなすことができる。

より深いところで、しかも、徒党という極端な現象以外のところでも、社会が若者を枠にはめることに完全に失敗していることに出くわす。家庭による枠づけは、幸運にも崩壊する。かつて認められていた生きる理由が崩壊し、さらには、人々の中の、まして世代間の最低限の共通の慣習が消滅するとともに。古い世代の人々は、いまなお過去の幻想の断片を共有しており、とりわけ、習慣的な労働や自ら受け入れた「責任」によって、あるいはまた、もはや生活から何も期待しないという習慣に帰着するすべての習慣によって眠らされているからである。現在の徒党は、平和と高水準の消費のなかで家庭というものが新しいかたちで解体されたために産み出されたものであると考えられる。両親の肉体的破壊と飢餓とを起源に持つ、ロシアの内戦時代の浮浪児たちの群れとは対照的である。政治的枠づけは、伝統的な政治団体と命運をともにして、ほとんど無に等しくなっている。P S U〔統一社会党〕の学生大会に際して、今年作成された、若者に関する資料によれば、フランスでは「若者の政治運動が背後に若者の群衆を引き連れていた時代は過ぎ去った。運動に加わっている若者は全体の10パーセントに満たない。しかもこの10パーセントの大部分が、宗教的な——そう公称しているのもないものもあるが——組織に所属している」。確かに、最も反動的な体制順応主義——それは最も首尾一貫したものでもある——に今なお従っている少数の若者のなかにこそ、当然、あらゆる種類の教育者にとってメンバー募集最大の可能性が残っているであろう。かくして、イギリスでは、「保守派青年」クラブのスノビズムの成功が、労働党の官僚主義者たちを動揺させ、彼らはそれ以後、それを手本にして、シツクな労働党とのダンス・パーティを企画するのに余念がない。文字どおり文化的な枠づけという強力な武器が失敗したのは言うまでもない。就学期間の順調な伸びによって、大多数の若者がある程度の文化に接することが可能になった今、当の文化はもはや自分自身を信じていない。もはや、誰も欺かない。誰にも興味を持たせないのだ。

消費と自由な時間の社会は、空虚な時間の社会、空虚を消費する社会として生きられる。そうした社会が産み出した暴力のために、すでにアメリカの多くの都市の警察は、19歳未満の〔未成年者の〕夜間外出禁止令を制定せざるをえなくなったほどだが、生の使い方を根本から問題にしているそのような暴力を認め、擁護し、救い出せるのは、その生の使い方にすべての面がかかかかる要求計画をはっきりと打ち出している革命運動を措いてほかにないだろう。

若者の恐るべき現実をプロのへぼ役者集団の陰に隠しておくことは今後ますます難しくなるだろう。彼らは、文化の舞台に、「ビートニック」とか「アングリー・ヤング・メン」とか、もっと甘ったるい「ヌーヴェル・ヴァーグ」の名の下に、若者の不穏当箇所を削除したパロディを上演しているに過ぎない。たった10年前には、「前衛」に固有だったもの——それは、たとえば、サン・ジェルマン・デ・プレで善良な人々をひどく憤慨させたものだった（当時は、それは、かつての芸術家気取りのボヘミアン生活をまだそれほどはっきりと脱してはいなかった。それは文化に回収されるおそれのある反芸術家だった。）——が、今はいたるところに広まっている。5月14日付けの『ジュルナル・デュ・ディマンシュ』紙は、フランスの善良な田舎の終りを告げる。ムラン*1で、「真夜中に数10本もの盗んだ高級ワインを入れた重い旅行鞆を運んでいた」2人の若者が巡回中の警官に偶然出会った。「2人の泥棒は、片方の祖母の、普段は使われていないアパートの部屋で行う大『ダンスパーティ』で、そのワインを飲むつもりだったと実際、自白した。彼らは、こうしたダンスパーティには、15歳から18歳までの少年少女だけが来て、ひどくあられもない姿でいるのだと説明した。こうした集まりは非常にみだらなものであったので、それに参加していたムラン地域の8人の少年少女が、盗みと共犯に加えて風俗紊乱罪でも告訴された。3人の若者——15歳の少年と17歳の少年と少女——は投獄された。告訴された残りの5人は仮釈放された」。

シチュアシオニストが合法的行為という狭い選択の幅を全面的に拒否することを支持していることは明白である。S Iは、少なくとも、空虚な日常生活をとことんまで推し進めた経験と、それを乗り越える探求との上に組織された。S Iはこの路線を逸れることはどうしてもできないだろう。その主張やそのメンバーの一員が出会うかもしれない公の成功（この言葉の非常に広い意味で、すなわち、文化の支配的なメカニズムのなかでの成功）はすべて、極度に疑わしいものと考えられなければなるまい。情報と賞罰を司る機構全体がわれわれの敵の手にあるのだから、現状においてスキャンダルと呼ばれる、体験の非合法性が明るみに出されるのは、それに向けられた弾圧のいくつかの細部においてだけである。S Iは、この世界に反対して、より激しく、より完全なスキャンダルをいくつも巻き起こすつもりである。空調を施した空虚を取締る警察などものともせず、無為の時間の、仰々しい社会機構の下のほとんどいたるところに出現しつつある、非合法的な自由から出発してそれを行うのだ。われわれは起こりうる次の展開を知っている。秩序は君臨してはいるが、統治していないのである。

*1：ムラン バリの南南東40キロにある、セヌ・エ・マルヌ県の県庁所在地。人口約4万人。

訳者解題

アッティラ・コターニとラウル・ヴァネーゲムの筆によるこの「基本綱領」は、ロンドンで開かれたS I第4回大会での「統一的都市計画事務局に関する決議」を受け、アムステルダムからブリュッセルに移転して再出発した〈統一的都市計画事務局〉の宣言的綱領文である（なお、リンク先ではアムステルダムの機関もブリュッセルの機関も区別せずに「統一的都市計画研究所」としたが、その原文はアムステルダムの方は《bureau de recherches pour un urbanisme unitaire》であり、ブリュッセルの方は《bureau d'urbanisme unitaire》であった。前者は研究機関であったのに対して、後者はより実践的な「研究と応用」のための機関であるとして、S Iは移転にともないその名称を変更したと考えられるので、前者を「統一的都市計画のための研究所」、後者の訳も前者とは変えて「統一的都市計画事務局」とすることにする）。アムステルダムの〈統一的都市計画のための研究所〉は、59年4月、ミュンヘンのS I第3回大会での決議を得て開設されたS Iの正式機関であったが、実質的にはコンスタントのヘゲモニーのもとで運営されたものと思われる。コンスタントはS I結成以前から「ニュー・バビロン」という名の都市計画あるいは建築のプロジェクトを構想しており、アムステルダムの〈統一的都市計画のための研究所〉もまた、その活動の具体的内実は「ニュー・バビロン」の実現のための研究が主だったようだ。しかし、コンスタントの技術至上主義的傾向が、ドゥボールらの考えと相容れなくなり、わずか1年半の後に、コンスタントはS Iの脱退を余儀なくされ、同時にこの研究所は閉鎖された（参照）。コンスタントの技術至上主義的傾向とは、あくまでも「作品」の「実現」を通して自己を実現する古い「芸術家」としての態度であり、そうした態度はドゥボールの当初からの考え（「作品」に基づかない活動、既存の要素の「転用」による「状況の構築」）と最終的には相容れないものであったが、S I結成当初の段階ではこの傾向は顕在化していなかった。コンスタントはむしろ、60年6月のS Iイタリア・セクションのメンバーの除名の際には、「作品」を志向するピノ＝ガッツィオやジオルス・メラノッテらイタリアのシチュアシオニストらをドゥボールとともに批判する側にまわったぐらいである（「シチュアシオニスト情報」を参照）。しかし、S I結成から4年を経て、コンスタントが自らもさまざまなかたち（マーケット製作、展覧会など）で「ニュー・バビロン」のプロジェクトを具体化させるための活動を積極的に展開するにつれて、現実の社会とその社会に対する批判とは切り離されたところで技術的な側面だけを重視すると同時に、非シチュアシオニストの建築専門家と協力して活動し始めたことからドゥボールらとの間の矛盾が拡大し、コンスタントは「ニュー・バビロン」を実現するためという表向きの理由でS Iを去ることを選択せざるをえなくなったのである。

このコンスタントの脱退劇に、この時期S Iに新たに参加したアッティラ・コターニやヴァネーゲムらの――芸術家出身ではないメンバーが大きな役割を果たしたと考えられる。彼らは、当初からドゥボールの考えの中にある社会批判的な部分に強い影響を受けてS Iに参加し、芸術家としての活動とは一定別の脈絡で最初からラディカルな社会批判を開始していた。ドゥボー

ルの「思想」にある意味で忠実なこの新しいメンバーが、S I という集団に当初から染み着いていた「芸術家」の残滓を一掃する大きな役割を果たしたのである。彼らを中心にブリュッセルに開設された新しい〈統一的都市計画事務局〉は、それゆえ、コンスタントの構想した都市計画に代わる何らかの新しい「都市計画」を構想するのではなく、「都市計画は存在しない。それは、マルクスのいう意味での『イデオロギー』にすぎない」という言葉で、「作品」の「実現」としての「都市計画」そのものを批判する。その批判の底には、ブルジョワ的な「都市計画」が問題であるとして、そうした「都市計画」のイデオロギー性を暴露したり、それに対抗するシチュアシオニストの「都市計画」を構想したりするのではなく、むしろ「都市計画」そのものがイデオロギーであるという認識のうえに、そのイデオロギーそのものを拒否するのだという彼らの強い決意がうかがえる。これは、シチュアシオニストのメンバーの作る芸術作品は「反シチュアシオニスト的」としか呼びえないとして、「作品」による活動そのものを否定する時のコターニイ（S I 第5回大会での発言を参照）や、「問題は拒否のスペクタクルを作り上げるのではなく、スペクタクルを拒否することにほかならない」との認識の上にシチュアシオニズムなるものも、シチュアシオニスト的芸術作品なるものも存在しない」として「作品」による運動を明確に拒否する時のヴァネーゲーム（S I 第5回大会での「基調報告」）にも共通した姿勢である。

1 都市計画の虚無とスペクタクルの虚無

都市計画（ユルバニズム）は存在しない。それは、マルクスのいう意味での「イデオロギー」にすぎない。建築は現実存在する。コカコーラのように。それは、イデオロギーで包まれているが、偽造された欲求を偽って満足させる、現実の生産物である。それに対して、都市計画は、コカコーラをめぐる宣伝にも比すべき、人目を引く（スペクタキュラー）単なるイデオロギーにすぎない。社会生活全体を見せ物（スペクタクル）におとしめることを企図する現代資本主義は、われわれ自身の疎外の見せ物以外の見せ物を提供できない。都市計画の夢がその傑作である。

2 大衆操作および虚偽の参加としての都市の計画化（プラニフィカシオン）

都市環境の発展は空間の資本主義的教育である。それは、可能性のある形での具現を、他の形での具現を排除して選択することを表している。都心計画は、美学がたどった解体の道を今たどろうとしているが、それは美学と同じように犯罪学のかなりなおざりにされた1部門と考えることもできる。しかしながら、単なる建築の水準に比べて、それを「都市計画」の水準で特徴づけているのは、大衆操作を官僚主義的に生産しはじめするには、住民の同意、つまり個人の統合が必

要となるということである。

これらすべては、有用性を盾にとった脅迫によって押しつけられているが、この有用性が完全に重要であるのは再建設*1に使用されるためであるということは隠蔽されている。現代資本主義は、家が必要だという単純な議論によってあらゆる批判を断念させる。それは、情報や楽しみが必要であるという口実でテレビを受け入れさせるのと同じだ。こうして、この情報、この楽しみ、この居住様式が人々のために作られるのではなく、人々なしで、人々に反して作られるという、明白な事実を無視させるように仕向けるのである。

都市の計画化はすべて、社会の広告宣伝の場——つまり、参加することの不可能な何かのなかへの参加の組織化——としてのみ理解されるべきである。

3 都市の計画化の最高段階としての交通

交通は万人の孤立の組織化である。この点で、それは現代都市の支配的な問題となる。それは出会いとは逆のものであり、出会いや、どのような種類の参加にも使いうるエネルギーを吸収するものである。不可能となった参加はスペクタクルのかたちで埋め合わされる。スペクタクルは住居や移動手段のなかに現れる（住居や個人の乗り物の豪華さとして）。というのは、実際は、人はある町のある界隈に住むのではなく、権力に住むからである。人はヒエラルキーのなかのどこかに住んでいる。このヒエラルキーの頂点では、序列は、交通の度合いによって計ることができる。権力は、日常的にますます互いに遠く離れた、ますます多くの場所（商用の夕食）にいる義務によって具体化される。現代の上級管理職を、1日の間に3つの首都にいることがある人として特徴づけることもできるだろう。

4 都市のスペクタクルの前での異化

住民を統合しようとするスペクタクルの全休は、都市開発としても、恒常的な情報ネットワークとしても現れる。それは、現存する生活条件を守るための堅固な枠組みである。われわれの最初の仕事は、人々に、環境や模範的行動と自己同一化するのをやめさせる事である。そのためには、人間的な活動のために画定された初歩的ないくつかの地域で自由に活動する自分を認めることができなければならない。人々は、これからもなお長い間、都市を物象化する時代を受け入れねばならないだろう。しかし、彼がそれを受け入れる態度は今すぐにでも変わりうる。西側でも東側でも、新しいベッドタウンが作り出す、快適で色とりどりの幼稚園に対する警戒心が広まることを支持しなければならない。覚醒だけが、都市関係の自覚的な構築という問題を提起するだろう。

5 分割できない自由

今ある都市計画化の主要な成功は、われわれが統一的都市計画と呼ぶもの、すなわち、日常生活全体の緊張によって育まれた、都市とその住民の操作に対する生き生きとした批判の可能性を忘れさせることにある。生き生きとした批判とは、実験的な生活のための基地の建設を意味している。つまり、目的にかなった設備のある場所に、自分自身の生を創造する者たちを集めることである。このような基地は、社会から切り離された「余暇」のために取っておかれたものではない。時空間上のいかなる地域も完全に切り離すことはできない。実際、今あるヴァカンス「専用地域」には、常に社会全体の圧力がかかっている。シチュアシオニストの基地においては、この圧力が逆の方向に働くだらう。それは、日常生活全体に侵入するための橋頭堡の役割を果たすだらう。統一的都市計画は、専門化した行為とは正反対のものである。切り離された都市計画の領域を認めることは、都市計画の虚偽全体を認めることであり、生活全体のなかに虚偽を認めることである。

都市計画において約束されているのは幸福である。それゆえ、都市計画はこの約束において判断されるであらう。芸術的告発手段と哲学的告発の手段の連携は、必ずや既存の大衆操作を完全に告発することになるだらう。

6 上陸作戦

全空間はすでに敵によって占拠されている。敵はこの空間の基本的な規則（裁判機関のみならず幾何学までも）をも自分用に馴致した。真の都市計画が現れる契機は、いくつかの地域に、こうした占拠の空白を作り出すことであらう。われわれが構築と呼ぶものはそこから始まる。それは、現代物理学が作り出した「正札（ホール）」の概念を使って理解することができよう。自由を実現するとは、まず、馴致された惑星からその表面のいくつかの区画を巻き上げることである。

7 転用の光

統一的都市計画の理論の初歩的な行使は、都心計画の理論的虚偽全体を、疎外の克服という目的に転用して、書き変えることであらう。大衆操作の吟唱詩人の叙事詩から、たえず身を守り、そのリズムを覆さなければならない。

8 対話の条件

機能的なものは実用的なものである。実用的なのは、われわれの根本問題の解決だけであるす

なわち、自己の実現（孤立の体制からの離脱）である。これが有益で実利的なものである。これ以外にはない。残りはすべて、実践から派生した些事、実践の欺瞞を示しているにすぎない。

9 原材料と変形

現在の大衆操作のシチュアシオニスト的な破壊は、それだけで、同時に、状況の構築である。それは、化石化した日常生活に含まれている無尽蔵のエネルギーの解放である。個人——現在そういうものとしてはまだ存在していない——が将来、自由に自分自身の歴史を構築するときには、虚偽の地質学として姿を見せる現在の都市の計画化（プラニフィカシオン）は、統一的都市計画とともに姿を消し、それに代わって、常に脅かされる自由の諸条件を守るための技術が生まれることだろう。

われわれは、大衆操作の前のどこかの段階に戻らねばならないと主張しているのではない。それを越えたところに向かわなければならないのだ。われわれが考案した建築と都市計画は、日常生活の革命なしには、すなわち、すべての人が大衆操作を自分の手にし、それを限りなく充実させて実現することなしには、実現不可能である。

アッティラ・コターニィ、ラウル・ヴァネーケム*2

*1：再建設 「再建設」（reedification）は「物象化」（reification）の誤植。

*2：ラウル・ヴァネーケム（1934-） ベルギー生まれのシチュアシオニスト。1952年から56年までブリュッセル自由大学でロマンス語文献学を勉強。61年から70年までS1ベルギー・セクションで活動。67年に出版した『若者用処世術概論』は、ドゥボールの『スペクタクルの社会』とともにシチュアシオニストの書物として爆発的に読まれた。シチュアシオニスト以降の著作に『快樂の書』（79年）など

訳者解題

最後の付記にあるように、ドゥボールのこの論文は、パリの国立科学研究所（CNRS）の社会学研究センターでアンリ・ルフェーヴルの主宰していた日常生活研究グループのセミナーで、テープレコーダーを使って発表されたものである。ルフェーヴルは、1945年からこの年（1961年）まで、この研究所の主任研究員をつとめ、その間に日常生活批判に関する研究を積み重ねてきていた。その成果は、1957年にアルシュ書店から出版された『日常生活批判』（邦訳『日常生活批判 序説』、田中仁彦訳、現代思潮社、1968年。以下『序説』とする）と62年の大部の『日常生活批判2 日常性の社会学の基礎』（邦訳『日常生活批判1』奥山秀美・松原雅典子訳、現代思潮社、1969年）として刊行される。前者が、フランス解放直後の1945年8月から11月に書かれ、1947年にグラッセ書店から出された『日常生活批判序説』に新たな長い序文を付して再刊したものであることを考えると、ルフェーヴルの日常生活批判の成果は、ドゥボールのこの論文とほぼ同時にまとまったかたちで刊行されたことになる。

シチュアシオニストの運動と、その前身であるレトリストあるいはコブラの運動が、ルフェーヴルの『日常生活批判』に影響を受けていることは、例えば、『シチュアシオニストと68年5月』の著者パスカル・デュモンティエ（Pasca1 Dumontier, Les Situationistes et mai 68, Editions Gerard Lebovici, 1990）などが指摘している。だが、厳密に言うと、47年の出版当時「少数の熱心な読者を除いては、〔……〕冷く迎えられた」（邦訳「あとがき」）『日常生活批判』の直接の影響を受けたのは、シチュアシオニストの「本流」であるレトリスト・インターナショナル（LI）の系譜に連なるドゥボールよりも、コブラのアスガー・ヨルンやコンスタントラシチュアシオニストの「傍流」の方である。LIの運動（1952年から57年）は、コブラの運動（48年から51年）よりも時期的に後であるにも関わらず、LIの機関誌『ポトラッチ』には、ルフェーヴルのこの書物に関する言及もルフェーヴルその人への言及も一切なされてはいない。一方、コブラは、そのベルギーの中心メンバーであるクリスチアン・ドトルモンが、コブラ結成以前からルフェーヴルに注目していた。彼は、神秘主義化しかシュルレアリスムと訣別してフランス人のノエル・アルノーらと作った〈革命的シュルレアリスム〉の結成（1947年）のための国際会議での基調報告の際に、出版されたばかりのルフェーヴルの『日常生活批判』を援用して「日常生活の実験」という考えを自分たちの基本方針とすることを提案している。自分たちの芸術実験の場を、戦後の秘教化したシュルレアリスムのように脳髓のなかに据えるのではなく、日常生活という社会的な場に据え、芸術活動を日常生活に対する実験的介入のための道具とするというドトルモンの考えは、48年以降のコブラの運動においてヨルンやコンスタントラに共有され、運動の中心的課題となる。コブラの研究者ジャン＝クラレンス・ランベール（Jean-Clarence Lambert, Cobra, Chane/Hachette, 1983）は、コブラの初期の2回の展覧会「目的と手段」展と「時代を通して見たオブジェ」展の名称はルフェーヴルの『日常生活批判』の強い影響を受けたものだとして述べている。

しかし、こうした表面上の影響関係の有無とは別に、ルフェーヴルの言う日常生活批判の理論と実践の深化という点では、コブラよりもむしろドゥボールの方がよりラディカルにそれを行ったと言える。コブラは、日常生活の実験を掲げて活動したと言っても、その活動は作品の製作と機関誌の発行、何回かの展覧会とワークショップなど、前衛芸術運動の活動を逸脱するものではなかった。それに対して、ドゥボールのレトリスト・インターナショナルの運動は、最初から「作品の創造」による「主体」の実現というロマン主義的な芸術概念を乗り越える運動だった。L Iの「心理地理学」や「漂流」、「新しい都市計画」、あるいは「状況の構築」という概念や活動は、作品を作ることを至上目的とするのではなく、都市の日常生活のなかでの集団的な彷徨という行動や日常生活で出会うさまざまな要素の「転用」の行為こそを自分たちの作品なき「作品」とすることによって、まさに日常生活批判を実践的に行ったのである。「日常生活の意識的変更」という、ここでのドゥボールの言い方は、L I以来のそうした活動の上に発せられた言葉である。

1947年のルフェーヴルの『日常生活批判』は、もちろん、そこまでの射程を持ったものではなかった。フランス共産党とまだ決定的に決裂していなかったこの時期のルフェーヴル（彼が『マルクス主義の現実的諸問題』を書くとともにハンガリー事件への共産党の態度を批判して党を除名されるのは1957年のことである）にとって、日常生活批判は何よりも先ず認識の問題であり、彼の言う日常生活批判はまだマルクス主義の読み直しとして構想されていた。また、日常生活の内部への技術の浸透がまだ十分に顕在化していなかった解放直後の社会状況のなかで書かれたこの本の限界として、初期マルクスの思想における「物象化」と「疎外」の概念の現代資本主義における意義を十分に把握していなかった。そのために、ルフェーヴルの日常生活をめぐる記述には3種の「人間主義」が染み着き、「全体性」の「回復」というどこかロマン主義的色彩の色濃いものになっている。ルフェーヴルが労働者の日常生活がブルジョワ的一面と人間的一面を持つというとき、あるいはまた、労働者は「疎外された労働」にさらされていると言うとき、そこには、日常生活の「人間的側面」と「疎外されていない労働」の「本質」への期待がまだ見受けられる。これは、この時期のルフェーヴルの日常生活のモデルが、都市のそれと言うよりはむしろフランスの農村のそれであり（彼は、社会学者としては農村社会学の研究から出発した）、大ブルジョワと小ブルジョワ、労働者それぞれの階級がまだはっきりと分化し、それぞれが独自の文化を持っていた古き良き時代の日常生活しか見ていなかったことに起因するのかもしれない。

10年後、フランスの資本主義が「新資本主義」としての相貌を見せ始めた時代に再開されたルフェーヴルの日常生活批判の社会学の試みは、47年の『日常生活批判』の限界を踏み越えようとするものだった。そこでは、文学や演劇、美術などの領域での現代芸術のさまざまな試みや哲学・社会学などの学問的探究、喫茶店、ラジオ・テレビ、女性週刊誌、自動車、ニュータウン、オートメーション工場、消費、余暇など都市に現出する日常生活のさまざまな事象を対象として、「現代世界」の日常生活の根源的疎外情況を描き出そうとする。これらの試みは、そのスタンスこそ違え（ルフェーヴルの関心は日常生活批判の社会学を創始することであり、日常生活を批判的に記述することであるのに対し、ドゥボールの関心は日常生活を実践的・意識的に変更することである）、ドゥボールが10年来行ってきた批判の領域と大きく重なる。「日常生活

」への注目という点や、「日常生活」という用語の採用という点では、ルフェーヴルは確かにその47年の著書によってドゥボールらに直接・間接の影響を与えたと言うことはできるかも知れないが、その内実については、ルフェーヴルの日常生活批判がシチュアシオニストに影響を与えたというよりむしろ、シチュアシオニストの活動がルフェーヴルの日常生活批判の内実を豊かにしたと言うべきであろう。実際に、ルフェーヴルは、『日常生活批判2 日常性の社会学の基礎』の「第1章 問題の要約」のなかで、「日常生活は、ギー・ドゥボールの思い切った表現に従えば、文字通り《植民地化》されている」（邦訳167ページ）という言い方で、ドゥボールのこの論文を引用している。

日常生活を研究することは、その日常生活を変革するために研究することを明確に自らに課すのでなければ、完全にばかげた企てとなるだろう。まず何よりもそれは、その対象を何1つ捉えることができないことを運命づけられることになるだろう。

講演会、すなわち聴衆を前にしたいいくつかの知的考察の発表は、社会のかなり広範な領域における極端に凡庸な形態の人間関係として、それ自体もまた日常生活の批判の対象である。

例えば、社会学者は、自分に常に起きていることを、日常生活から引き離し、分離された——上位の、と言われる——圏域に放り出す傾向があまりに大きい。これはあらゆる形で社会学者に見られる習慣だが、その第一のものとして、いくつかの専門的概念——それゆえ、労働の分割〔=分業〕の産物——を操作する習慣がある。この操作によって、彼らは特権化されたさまざまな取り決めのかげに現実を隠蔽するのである。

そこで、通常の講演のやり方を少しずらせることによって、この場所こそが日常生活の場であることを見せることが望ましい。もちろん、これらの言葉をテープレコーダーで流しているのは、技術的世界の周縁に追いやられているこの日常生活のなかに技術を統合することを例証したいからではなく、どんなに小さな機会をもとらえて、「現に姿を見せている」講演者と観客との間で制度化されている偽の共同作業、まがい物の対話の外観と訣別したいからである。安楽をこうして少し破壊することによって、日常生活を疑問視する領域（安楽の破壊がなければ、これはまったく抽象的な疑問視になってしまう）のなかに、時間や事物を使用するための他の多くの手段とともに、講演そのものをも一挙に引きずり込むことが可能になるのである。これらの手段は、「正常な手段である」という評判を得ているが、誰も眼にしたことさえない代物である。しかし、結局はこうした手段によってわれわれは条件づけられているのである。日常生活の総体そのものについてと同様に、このような細部についても変更を強いることは、われわれの研究対象を実験的に出現させるうえで常に必要かつ十分な条件である。この対象は、変更されないならば、疑わしいものになり果てるだろう。この対象自体、研究されるよりもむしろ変更させられるべきものなのである。

わたしは今し方、「日常生活」という語で示されるかもしれない観察可能な総体の現実性は、

多くの者にとって仮定のままとどまるおそれがあると言った。事実この研究グループが構成されてから、最も目に付く特徴は明らかに、それがまだ何も発見していないということではなく、日常生活の存在そのものへの異議申し立ての声、最初の瞬間からそこで聞こえていたということであり、そして、回を重ねるごとに、その声が強まってきているということである。この議論においてこれまで聞くことのできた発言の大半は、日常生活というものにはどこでも出会ったことがないのだから、そんなものが存在するなどとはまったく信じていない者から出されたものである。こうした精神に鼓舞された日常生活の研究グループは、あらゆる点で、ヒマラヤの雪男を探しに出かけるグループに比することができる。日常生活の存在を信じていない日常生活の研究グループのように、このグループもまた、調査の結果、雪男は民間伝承にふさわしい冗談であるという結論に達することだろう。

しかしながら、ドアを開けたりグラスを満たしたりするような、毎日繰り返されるいくつかの行為が、完全に現実のものであることは誰もが認めている。だが、それらの行為はあまりに些末なレベルの現実に属しているため、社会学研究の新たな専門分野を正当化するほど興味深いものでありうるということに対しては、正当にも異議が申し立てられるのである。そして、社会学者のなかには、アンリ・ルフェーヴルが提案した日常生活の定義、すなわち「経験のなかからあらゆる専門的活動を取り除いた時に残るもの」という定義から出発して、日常生活には〔専門的活動の〕ほかにさまざまな側面があることを想像だにしない者がいるようだ。ここに見出されるのは、それゆえほとんどすべての社会学者——彼らがまさにその専門的活動においてどれほど自分のしたい放題をし、いつもそれにどれほど盲目的な信仰を抱いているかは周知の事実だ！——そうした社会学者があらゆるところに専門的活動を認めるのに、日常生活はどこにも認めないということである。日常生活は常にどこかほかの所にある。他の者のところにある。いずれにせよ、社会学者ではない階層の人々のなかにあるのである。ここで、次のように言った者がいる。日常生活というこのウィルスにおそらく感染したモルモットとして、労働者を研究するのは興味深いだろう、なぜなら、専門的活動への道を閉ざされた労働者は、日常生活を生きるしかないからだ、と。民衆を調査しながら、日常的なもののなかに遠い昔のプリミティヴィズムを探し求めるこのやり方、そしてとりわけ、ある文化が火を見るくらい明らかに破産し、その文化を作り出している世界がだれにもまったく理解できないでいるにもかかわらず、そこに参加していることへのこの率直で公然たる満足、このお目出たい（ナイーブ）プライド、これらすべては驚くにはあたらない。

そこには、人工的に細分化された諸分野の分離の上に築かれた思想の形成のかげに避難し、「日常生活」という役立たずで通俗的で厄介な概念を放棄しようとする明白な意志が存在する。「日常生活」という概念は、類別され分類された現実の残滓をカバーする。この残滓に立ち向かうことを嫌う者もいるが、それは、この残滓に立ち向かうことが同時に全体性の観点を要請するからだ。それには当然、ある包括的な判断、ある政治が必要である。ある種の知識人は、1つあるいは複数の文化上の専門分野を所有することを通して、社会の支配的領域に参加しているという個人的幻想を自慢しているようである。しかし、それがために、彼らは最前列に加えられ、この支配的文化の総体が明らかに蝕まれていることに気づくのである。だが、この文化の一貫性、あるいは細部への関心についてどのように判断しても、この文化が今問題にしている知識人たちに

強いてきた疎外は明白である。彼らはこの疎外のせいで、まるで自分たちもまたどちらかと言えば貧しい者ではないかのように、自分たちが平凡な住人の日常生活の完全な外部にいる、あるいは人間の能力のあまりに高い階梯に位置すると、社会学者の空の高みから判断させられているのである。

確かに、専門化された活動は実在している。それは、ある特定の時代に、広く用いられた活動でさえある。それを曇りない眼で〔＝脱神話化された仕方〕認めることは常に良い。日常生活は、ある意味では、日常生活の外部が存在しないまでに専門的活動に浸透することがあるとはいえ、日常生活がすべてではない。しかし、さまざまな活動を空間的に表象する平易なイメージの助けを借りるとすれば、やはり日常生活をすべての中心に置かねばならない。どんな計測も日常生活から出発し、どんな成果もそこに戻ってきて真の意味を持つのである。日常生活は万物の尺度である。人間関係の成就あるいはむしろ非・成就の、生きられた時間の用途の、芸術の探究の、革命的政治の尺度なのである。

公平無私な観察者の描いた古びた科学的エピナル版画*1のようなものは、いずれにせよ人を欺くものであると念を押すだけでは十分ではない。公平無私な観察というものが、ここでは他のどこよりも行いにくいという事実を強調せねばならない。日常生活の場を認識すること自体が困難なのは、単にその場が既に経験論的社会学と概念の練り上げとの出会いの場であるからだけでなく、その場が今、文化と政治のあらゆる革命的刷新の争点となっているからでもある。

批判を受けない日常生活とは、文化と政治の深く墮落した現行の形式を今も延長することを意味するにすぎない。この形式がはらむ危機はとりわけ最も近代的な国々において極度に進んでおり、それは非政治化と新たな文盲状態の一般化として表されている。逆に、与えられた日常生活のラディカルな——行為による——批判は、伝統的な意味での文化と政治の乗り越えに、すなわち生活に対するより上位のレベルでの介入に道を開きうる。

だが、この日常生活——それこそがわたしの考えでは唯一の現実である——の重要性が、そうしたラディカルな批判を行うことに結局は何の直接的関心も持たない人々——その多くはおそらく革命運動の何らかの蘇生に敵対しない人間でさえある——からこれほども完全に、これほども即座に軽視されるのは、いったいどうしてなのか、と、そのように言われるかも知れない。

わたしの考えでは、それは、日常生活かスキャンダラスなまでの貧しさの限界のなかで組織されているからだ。とりわけ、この日常生活の貧困が何ら偶然のものではないからである。それは、階級に分割された社会の制約と暴力によって、いかなる瞬間にも日常生活に課せられた貧困であり、搾取の歴史の必要に従って歴史的に組織されてきた貧困なのである。

生きられる時間の消費という意味での日常生活の使用は、稀少性の支配によって制御されている。それは自由時間の希少性であり、またその自由時間の可能な用途の希少性でもある。

われわれの時代の加速された歴史が蓄積の歴史、産業化の歴史であるのと同様に、日常生活の立ち遅れや現状維持へのその傾向は、この産業化を導いてきた法則と利害関係との産物である。日常生活は、現在まで、実際に歴史的なものへの抵抗を示してきた。それは何よりもまず歴史的なものを裁くが、裁かれるのは搾取社会の遺産と企図としての歴史である。

日常生活において人々の創造性を意識的に組織することが極端に乏しいという事態は、搾取の社会、すなわち疎外の社会の無意識と欺瞞の根本的必要性を表現している。

アンリ・ルフェーヴルは、かつてここで、不均衡発展という考えを日常生活に拡大して適用し、歴史性とずれてはいるがそれと切り離されているのではない日常生活を、遅れた部門と性格付けた。わたしは、このレベルの日常生活を植民地化された部門と形容することさえできると思う。すでに見たように、世界経済の規模においては、低開発と植民地化とは相互に作用し合っているファクターである。あらゆる点からして、経済—社会的編成の規模における、実践（プラクシス）についてもそれは同様だと考えられる。

あらゆる手段を用いて欺かれ警察的なやり方で操作されている日常生活は、善良なる未開人のための一種の居留地である。彼らは、現代社会の何たるかも知らずに技術力の急速な増大と市場の強制的なか拡大によって現代社会を動かす原動力となっているのである。歴史——すなわち現実を変形すること——は、今のところ、日常生活に利用できていない。なぜなら、日常生活を送っている人間は、自分には制御できない歴史の産物であるからだ。人間自身がこの歴史を作っていることは明らかであるが、しかし自由にそれを行っているのではないのである。

現代社会は、互いにほとんど伝達不可能な専門化された断片として理解される。そして、日常生活は、あらゆる問題が統一的なやり方で提示される危険があるがゆえに、当然無知の支配する領域である。

この社会は、その産業生産を通して、労働の行為からあらゆる意味を抜き取り空っぽにした。そして、人間の振る舞いのいかなるモデルも、日常性のなかには真の現代的課題（アクチュアリテ）をまったく保持しなくなった。

この社会は人々を個々ばらばらな消費者にアトム化し、コミュニケーションを禁じる傾向がある。日常生活はこうして私生活（ヴィ・プリヴェ）〔＝剥奪された生活〕となった。分離とスペクタクルの支配する領域になったのである。

したがって、日常生活は専門家の役割の消滅する領域でもある。そこでは、例えば、最新の科学的宇宙像を理解する能力のある希有な個人の1人が、間抜けな人間になり、アラン・ロブ＝グリエ*2の芸術理論を長々と吟味するようになる。あるいは、その政策を変更させる意図をもって共和国大統領に請願書を送るようになるのである。それは武装解除の領域、生きる能力のないことを告白する領域である。

それゆえ、日常生活の発育不全〔＝低開発〕は、技術の統合に関する相対的無能力として性格付けられるだけではない。この特徴は、日常における疎外の総体の、重要ではあるが、いまだ部分的な成果でもある。この日常における疎外とは、日常的なものの解放の技術を発明することの無能力と定義されうるだろう。

事実、多くの技術が日常生活のいくつかの側面を多かれ少なかれはっきりと変化させている。ここで言われたように、家事の技術がそれだ。だがまた、電話、テレビ、LPレコードの音楽録音、大衆化した飛行機旅行などもある。これらの要素が、誰一人その関連も結果も予想することなく、アナーキーに、偶然に介入してくるのである。だが、日常生活のなかへの諸技術の導入というこの動きは、全体として見れば、最終的には官僚化された資本主義の合理性の枠にはめられることによって、むしろ人々の独立性と創造性を減少させる方向に進んでいることは確かである。こうして、今日のニュータウンは、現代資本主義による生の組織化の全体主義的傾向を明

白に示している。個々ばらばらな（家庭という独房枠のなかに皆同じように孤立させられた）個人はそこでは、繰り返されるスペクタクルを強制的に吸収するようにされ、自分たちの生が些末な出来事を単純に繰り返すだけのものになっているのを眼にするのである。

それゆえ、人々が自分自身の日常生活の問題に対して検閲を行っているとするれば、それは彼らが自分たちの日常生活は耐え難い悲惨であることを意識しているからであり、同時にまた、社会生活の働きによって妨げられてきたあらゆる真の可能性や欲望が存在したのは日常生活のなかであって、いかなる意味でも専門化された活動や娯楽のなかではなかったのだということを感じている——その感覚は公言こそされないが、いつか必ず身にしみて感じとられるだろう——からにはほかならない、と考えねばならない。つまり、日常生活のなかには深い富が、打ち捨てられたままのエネルギーがあることを認識することは、この生活の支配的なやり方での組織化の悲惨を認識することと切り離せない。活用されていないこの富を知覚できる存在だけが、それと対照して日常生活を悲惨としてまた牢獄として定義し、次に、その同じ動きによって、問題そのものを否定することができるのである。

こうした状況下で、日常生活の悲惨によって引き起こされた政治的問題に眼をつぶることは、この生活のありうべき富に関する深い要求に対して眼をふさぐことを意味する。そうした要求はまさしく革命の要求に行き着くよりほかはないだろう。このレベルの政治を前にして逃げ出すことは、例えば、統一社会党のなかで闘ったり、『ユマニテ』紙*3を信頼して読むことと何ら矛盾しないことは、誰でも認めることができるだろう。

実際、すべては、次の問いをどのようなレベルであえて提出できるかにかかっている——いかに生きているのか？ いかにしてそれに満足しているか？ あるいは、不満なのか？ しかも、神の存在やコルゲート歯磨き、C N R S [国立科学研究所]のおかげで人は幸福になれるということを納得させようとするさまざまな広告に一瞬たりとも怖じ気づかされることなく、この問いを発しなければならない。

「日常生活の批判」という語は〔主語を〕転倒して次のようにも理解できるし、そう理解せねばならないとわたしには思える。すなわち、日常生活が、その外部に空しく存在するすべてのものに対して見事に行使するであろうような批判、と。

日常生活においても他の領域でも、技術的手段の利用の問題は政治的問題以外の何物でもない（そして、見出すことのできるすべての技術的手段のうちで、実際に活用されているものは、本当は、一つの階級による支配を維持する目的に合致した形で選ばれたものである）。サイエンス・フィクションの文学が許容しているような未来——そこでは、惑星間の冒険が、今と同じ物質的貧困と古くさい道德のなかにとどまったままのこの地上の日常生活と共存している——の仮説を検討してみると、その未来の意味するところは次のようなものであることがわかる。まさに、そこにもまだ専門化された指導者が一階級をなして存在し、彼らは依然として工場と事務所のプロレタリアート大衆を自分の手下として持ち続け、惑星間の冒険は単にこれらの指導者によって選ばれた事業であり、不合理な彼らの経済を発展させるために彼ら自身が見出したやり方、すなわち専門化された活動の究極の姿にほかならない。

「私生活（ヴィ・プリヴェ）〔＝剥奪された生活〕といっても、それは何を剥奪されているのか」という問いがあった。端的に言って、生（ヴィ）を剥奪されているのである。私生活には

生が残酷なまでに不在である。人々はまた可能な限りコミュニケーションを剥奪されている。そして自己実現も剥奪されているのである。むしろこう言った方が良いだろう。自分自身の歴史を個人で作ることを剥奪されていると。剥奪の本性についてのこの問いに積極的に答えるための仮説は、したがって、豊かさを産み出す企図のかたちでしか言い表せないだろう。別の生活様式の企図、実際には、1つの様式（スタイル）の企図……。あるいは、日常生活が、支配を貫徹された生の部門といまだ支配を被っていない部門との境界線上にあり、それゆえ偶然に左右される場であることを考えるならば、現在のゲットーに代えて常に前進し続ける境界を作りだし、新たなチャンスを組織することができるようにならねばならないだろう。

体験の強度という問題は、今日では、例えば麻薬の使用によって、疎外の社会がどのような問題でも提起できるような用語を用いて差し出されている。わたしが言いたいのは、偽造された企図の偽の認識の言葉で、固着と執着の言葉で、ということだ。この社会で作り上げられ広められている愛のイメージがどれほど深く麻薬と関係しているか、注意を喚起しておくのも良いだろう。ここでは、情熱というものは、まず何よりも、他のすべての情熱を拒否することと認識されている。次にそれは禁じられ、最終的には、すべてに君臨するスペクタクルによって相殺されたかたちでしか存在しえない。ラ・ロシュフーコー*4は次のように書いている、「1つの悪徳だけにふけることをしばしばわれわれに禁じるものは、われわれが多くの悪徳を持っているということである」。教訓的な前提を捨て去り、この言葉に人間の諸能力を実現するためのプログラムの基礎としての元来の意味を返してやるなら、これはまさに非常に積極的な確認事項となる。

これらの問題はすべて今、日程に上がっている問題である。なぜなら、われわれの時代は、階級社会を廃絶し人間的歴史を開始するための企図——それは労働者階級によってもたらされた——の出現に明らかに支配され、それゆえ結果的に、この企図に対する執拗な抵抗、この企図のこれまでの歪曲〔＝横領〕と失敗によって支配されているからである。

日常生活の現在の危機は、資本主義の危機の新しい諸形態のなかに刻み込まれている。その形態は、経済危機の古典的周期を信じて次に訪れる危機の時期を推測することに躍起となっている者たちには気づくこともできないものである。

先進資本主義において、あらゆる古い価値と古いコミュニケーションのあらゆる参照枠が消滅したということ、にもかかわらず、ますますわれわれの手を逃れてゆく新しい工業力を、日常生活の場でもそれ以外のどんな場所でも、合理的に支配しないうちは、これらの価値と参照枠を何であれ別の価値や別のコミュニケーションの参照枠で置き換えることができないということ、これらの事実は、われわれの時代の半ば公然の不满、青年たちが説く感じ取っている不满だけでなく、芸術の自己否定の運動までも産み出している。芸術活動というものはこれまで常に、ヴェールに覆われ、変形され、部分的には幻想を抱いたやり方でもかもしれないが、日常生活の下に隠れた問題を説明する唯一のものであった。われわれの眼前にあるのは一切の芸術表現の破壊に関する証言である。それが現代芸術である。

現代の社会の危機をそのすべての広がりにおいて考えるならば、余暇というものをいまだに日常性の否定とみなすことが可能だとはわたしは思わない。かつてここで、「無駄な時間〔＝失われた時間〕を研究」しなければならないということが認められた。だが、無駄な時間という考えの最近の動きを見てみよう。古典的な資本主義にとって、無駄な時間とは生産と蓄積と貯蓄の外

にある時間である。ブルジョワジーの学校で敦えられる世俗的なモラルが、この生活の規則を植え込んだのである。だが、現代資本主義は、予期せぬ策略によって、消費を増大し、「生活水準を上げる」（この表現がまったく意味を失っていることをよく覚えておこう）ことを必要とするようになった。それと同時に、極限まで細分化され分刻みにされた生産条件は、完全に擁護しえないものとなったため、かつて広告やプロパガンダ、あらゆる形態の支配的スペクタクルのなかで流されていたモラルは、遂に無駄な時間とは労働の時間であると、やすやすと認めるようになった。労働はもはやさまざまな度合いの儲けによってしか正当化されず、この儲けが休息と消費と余暇——すなわち、資本主義によってでっち上げられコントロールされた日常的受動性——を買うことを可能にするのである。

今、現代の産業が完全にでっち上げ、たえず刺激し続けている消費の欲求の安易さを検討し、余暇の空虚さと休息の不可能性を認めるなら、より現実的なやり方で次のように問題を提出することができる。すなわち、無駄な時間でないものとは何なのか？ 言い換えると、豊かな社会の発展は、何の豊かさに到達することになるのか？

この問いは明らかに多くの点で試金石となる問いだ。例えば、左翼知識人と呼ばれる者たちの思考の一貫性の無さが並べ立てられている雑誌の1つ——『フランス・オブセルヴァトゥール』誌*5のことだ——には「社会主義に襲いかかる小型自動車」というような見出しを見ることができる。この見出しの下にある記事は、ロシア人が最近、アメリカ式のやり方で財——当然のことながら、まず手始めに自動車——の個人消費を個々人で追求し始めているようだということを説明している。小型自動車による市場の侵入を前にして後退するような社会主義は、いかなる意味でも労働運動がそのために闘ってきた社会主義ではないということだけにでも気づくのに、ヘーゲルと、それからマルクスの全著作をわがものにしては不可欠ではないと、これを読んでそう考えざるをえない。したがって、ロシアの官僚主義的指導者と対決せねばならないとしても、それは彼らの戦術や彼らの教条主義のあれこれの段階においてではなく、その根幹において、すなわち人々の生活が実際には何の意味も変えていないという事実においてである。このことは、反動的であり続けることを運命づけられた日常生活のあやふやな運命ではない。それは、専門化された指導者たちの反動的な階層が——彼らがあらゆる点で悲慘を計画化する際のレットルがどのようなものであれ——外部から日常生活に押しつけた運命なのである。

だから、かつての左翼活動家の多くが現在、非政治化し、1つの疎外から遠ざかり私生活の疎外という別の疎外のなかに身を投じていること、それは、「歴史性の責任」からの逃げ場としての私（わたくし）化へ回帰することを意味するというよりむしろ、専門化された、それゆえ常に他人によって人為的に操作された政府の領域から遠ざかることを意味するのである。そのような政治領域においては、人々が取る唯一の責任とは、すべての責任を誰の支配も及ばぬ指導者たちに任せることである。共産主義の企図はそのなかで歪められ裏切られたのである。どんな私生活か、どんな公的生活かを問うことなしに、私生活をまるごと公的生活に対置することができない（というのも、革命の集団行動がそれ自体の退化を産み出す要因を養ったこともあったように、私生活のなかにはそれ自体を否定しそれを乗り越える要因が含まれているからだ）のと同様に、問題は革命の政治それ自体が行う疎外であったにもかかわらず、個人の疎外を革命の政治にお

いて決算して破棄するのは間違いだろう。疎外の問題を弁証法的に提示し、疎外に対して行われている闘いのなかに常に再生してくる疎外の可能性を指摘することは正当なことであるが、その場合、これらすべては最も高いレベルの探究（例えば、疎外全休についての哲学）において適用すべきであって、スターリニズム——不幸にもその説明はより粗雑である——のレベルで適用すべきなのではないということを強調しておこう。

資本主義文明はまだどこでも乗り越えられていないが、それはいたるところで自ら自分の敵を産み出し続けている。次の革命運動の高揚は、これまでの敗北の教訓によってラディカルなものとなり、その要求のプログラムは現代社会の実戦的な力——いわゆるユートピア的社会主義の諸潮流には欠けていた物質的基盤を今から既に潜在的に構成する力——に応じて必ず豊かなものとなるだろう。資本主義に全面的に異議を申し立てるこの近い将来の試みは、日常生活の別の使用法を発明し提案することができるだろう。そして、たちまちにして、新しい日常的実践、新しいタイプの人間関係に基づくものとなるだろう（この人間関係は、既存社会を支配する関係を革命運動内部に保存すれば、知らぬ間に必ずその社会を——さまざまな変異体とともに——再興することになるということに対してははや無知ではない関係である。

かつてブルジョワジーが、その上昇期に、地上の生を越えるすべてのもの（天上界、永遠）を容赦なく清算しなければならなかったのと同様に、革命的プロレタリアート——それは、そのままの姿で存在し続けることをやめることなしには、自分たちに対して過去もモデルも決して認めることはできない——は日常生活を越えるすべてのものを捨て去らねばならないだろう。あるいはむしろ、「歴史的な」スペクタクルや身振りや言葉、指導者の「偉大さ」とか、専門化の神秘とか、芸術の「不死性」や生活外でのその重要性など、日常生活を越えるのだと言い張るものをすべて捨て去らねばならない。それはつまり、指導者の世界の武器として生き残ってきた永遠の副産物のすべてを捨て去らねばならないということである。

日常生活の革命は、歴史的なものに対する（そしてあらゆる種類の変化に対する）現在見られる抵抗を破り、現在が過去を支配し、創造性の役割がつねに反復の役割に勝るような条件を作り出すだろう。それゆえ、曖昧な概念によって表現されている——誤解され、評判を傷つけられ、誤った使われ方をしている——日常生活の側面が重要性ををなくし、それらとは逆の意味、すなわち意識的な選択とか賭という意味を持つことを期待せねばならない。

機械についてのあのメタ言語——それは権力に就いた官僚階級によって官僚化された言語以外の何物でもない——と時を同じくして現れた、現在の芸術家たちが行う言語に対する疑問視、それは、その時、より優れた形態のコミュニケーションによって乗り越えられるであろう。解読の対象としての社会テキストという今の概念は、わたしの同志であるシチュアシオニストたちが統一的都市計画と実験的行動様式の粗描によっていま探究しているものの方向に進むことで、きつこの社会テキストの新しい書き方に到達することになるだろう。産業労働を完全に転換して産み出される中心的産物は、日常生活の新しい地勢の整備であり、出来事の自由な創造であるだろう。

日常生活全体に対する批判とそのたえざる再創造は万人によって行われることは当然だが、それがなされるまでは、現在の抑圧状態のもとで、しかもその状態を破壊する目的で企てられねばならない。

それを成し遂げることができるのは、たとえ革命への共感を持ったものであったとしても前衛的な文化運動ではない。伝統的モデルに基づいた革命党でもない。たとえその革命党が文化批判に大きな場を与えていてもそうである。（〔文化という〕この語を、社会が自己に対して自己を説明し、生の目的を示すための芸術＝技術的あるいは概念的道具の総体と理解すること）。この文化も、この政治も、使い古されたものであり、大多数の者がそれらに無関心であるのは理由がないわけではない。二者択一の一方向の項が現代における奴隷制の強化であるときに、もう一方の項は日常生活の革命的変革である。この変革は、漠然とした未来に取って置かれているのではなく、資本主義の発展とその耐え難い要請によってわれわれの目の前にある。そうした革命的変革こそが、商品の形態のもとにストックされる一方通行の芸術表現のすべての終焉を記すと同時に、専門化された政治すべての終焉をも記すことができるだろう。

それは、新しいタイプの革命組織が形成されるやただちにその任務となる。

G = E · ドゥボール*6

この発表は、1961年5月17日、H・ルフェーヴルがCNR S〔国立科学研究所〕の社会学研究センター内に招集した「日常生活研究集団」で、テープレコーダーによってなされたものである。

*1: エピナル版画 フランスの地方都市エピナルで作られる通俗的な伝説や歴史を主題とした着色版画。

*2: アラン・ロブ＝グリエ（1922-）フランスの小説家。『消しゴム』（1953年）、『覗く人』（55年）などの小説によってヌーヴォー・ロマンの騎手とされる。・アラン・レネ監督の映画『去年マリエンバートで』（61年）の脚本、自らが監督した映画『不滅の女』（63年）によって、映画にも手を染めたが、これらはシチュアシオニストからこっぴどく批判されている。

*3: 『ユマニテ』紙 フランス共産党の機関新聞

*4: ラ・ロシュフーコー（1613-80年）フランスの作家。モラリスト文学の傑作『箴言』（65年）で知られる。

*5: 『フランス・オブセルヴァトゥール』誌 フランスの政治週刊誌。クロード・ブルデが1950年に『オブセルヴァトゥール』誌として刊行、その後、『フランス・オブセルヴァトゥール』と改名、64年に再度『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』と改名し現在に至る。ブルデを中心に、フランスにおける新しい左翼の形成に努め、60年の統一社会党の結成に寄与した

*6: ギー・エルネスト・ドゥボール（1931-94年）フランスのシチュアシオニスト。パリに生まれ、1950年代初頭にレトリズム運動に参加、レトリズムの主唱者イジドール・イズーの神秘主義化に反対してレトリスト左派を結集した「レトリスト・インターナショナル」を創設、「転用」、「漂流」、「心理地理学」、「新しい都市計画」などの芸術批判・日常生活批判を軸としたアヴァンギャルド芸術運動を展開。1956年に「シチュアシオニスト・インターナショナル」（S I）を創設し、1972年にS Iを解散するまで、一貫してその中心メンバーとして活動。

文化における社会的抑圧について

公認の欺瞞を単に再生産するだけではない現代の芸術家は、個人としてはみな、程度の差こそあれはっきりと社会生活の枠外へ打ち捨てられている。それは、彼らが、どれほど空しく断片的な手段を通じてであっても、社会生活の意味の問題、社会生活の使い方の問題を提起せざるをえないにもかかわらず、社会生活の方には、依然として意味がなく、受動的な消費以外にそのいかなる合法的な使い方もないからである。それゆえ当然、彼らは、往みにくい世界の劣悪な諸条件を指摘する。すると、その当然の帰結として、彼らは個人的に——快適な分離によってであれ、悲劇的な除去によってであれ——その世界から排除されるのである。

それとは逆に、それらすべての諸条件を、あるいはそのいくつかだけでも変革するという方針を明確に打ち出している前衛集団は、意識的かつ組織的な社会的弾圧に逢っている。その上な弾圧の形態は、例えばこの40年間に、社会そのものの進化や社会の敵の進化にともかつて、大きく変化した。

1920年頃のヨーロッパでは、文化や社会生活の公認の価値に反してスキャンダルをひき越すようなことはみんなから糾弾された。前衛は当時、呪われた者であり、またそうした者として世間に知られていた。第二次世界大戦以来発展してきた社会においては、もはや価値というものは存在せず、したがって当然ながら、慣習を尊重しないという非難は、もはや公衆のなかでも旧弊な部分、まったく時代遅れの一貫した慣習体系（例えばキリスト教的な物の見方）に固執し続けている部分からしか、支持されなくなっている。文化と情報をコントロールする者たちはもはや、新しい価値を生み出そうと企てる人々に対して、スキャンダルだと騒ぎ立てることはない。彼らは今や、固い沈黙を組織しようとしている。

こうした新しい闘争条件は、何よりもまず、新しい革命的前衛の作業を遅延させる。すなわち、新しい革命的前衛の形成を妨害し、次に、そうした前衛の発展を遅らせる。しかしながらまた、そうした闘争条件には、非常にプラスの意味もある。つまり、現代文化は空虚であり、前衛が前衛として認知されることに成功したときからは、いかに強力な力であれ、そうした前衛の決定に反対することができないだろう。そうした前衛の任務とは、ただ、いつの日か、自らの規律と方針が損なわれる前に、自らを認知せしめることだけである。それこそまさに、シチュアシオニスト・インターナショナルが行おうと考えていることである。

ローター・フィッシャー、ディーター・クンツェルマン、ウーヴェ・ラウゼン、ハイムラート・プレム、ヘルムート・シュトゥルム、ハンス＝ペーター・ツィンマー*1

この声明は、1961年2月、S I ドイツ・セクションの機関誌『シュプール』第4号に発表された。

よく話題になる者たちとは、より巧みに人目を引く（スペクタキュレール）反逆者たち、「誰もが憎みたがるような反逆者たち」である。しかしそのような者は長持ちしない。ひとは不誠実にも3、4年後、彼らの順応主義の証拠を見て失望した様子を見せる。しかしまさしく、彼らの順応主義がなかったなら、誰も彼らを革新者として公に認めはしなかったにちがいない。このよ

うに、支配的な文化は自らの中心的矛盾をもてあそんでいる。この矛盾は、新しいものの必要と新しいものの恐怖との矛盾であり、それは支配的な文化の死なのである。

* * *

怒れる若いイギリス人たちの熱狂はなんと短かったことか。(……)「アングリー・ヤング・メン」の運動は、ブルジョアジーの窓ガラスを恐怖で震え上がらせ、そして心を希望に震わせていた。何かが起ころうとしていた。オズボーン*2氏は成功した——そしてすでに彼は自分の地位に安住している。あらゆる順応主義を声高に拒否し、現代人に課された非人間的な生活条件に対して抗議する若い作家たちのことが話題になり始めたのは、1956、7年頃だった。(……)その集団は、しかしながら、まとまりがなかった。「アングリー・ヤング・メン」という共通の呼称は、共通の方針よりもむしろマスコミの方便によるものだった。(……)それだけではたぶん不十分だったのだろう。今日では、そのグループはもう、何の意味も持っていないし、存在さえしていない。個人の才能がそこから生まれた。(……)おつむの単純な独学者のコリン・ウィルソン*3は、もやもやとした神秘主義か何かにはまりこんでいる。とはいえ、彼らは完全に、彼らの国の文壇に取り込まれてしまったのである。

R・カンテール*4、『レクスプレス』誌1961年7月13日

神という観念が放つ腐った卵の臭いは、アメリカの「ビート・ジェネレーション」の神秘主義的な馬鹿者どもをすっぱり覆い込んでいるし、また、「アングリー・ヤング・メン」の声明にさえ、ないわけではない(コリン・ウィルソンを参照のこと)。「アングリー・ヤング・メン」は、一般的にいて、30年遅れて、イングランドがその間完全に彼らに隠してきた体制転覆的な精神風土を発見し、自分たちが共和制支持者であると宣言することによって、スキャンダルの最先端に立とうと考える。(……)「アングリー・ヤング・メン」は、文学の実践に、特別の価値、すなわち贖いの意味を認めるという点で、部分的に反動的でさえある。つまり、彼らは今日、ヨーロッパでは1920年頃糾弾されたある欺瞞の擁護者になっている。そしてその欺瞞の存続は、英国王室の存続よりも重大な反革命的影響力があるのである。

『アンテルナショナル・シチュアショニスト』誌 第1号(1958年6月)「論説」

*1: ローター・フィッシャー、ディーター・クンツェルマン、ウーヴェ・ラウゼン、ハイムラート・プレム、ヘルムート・シュトゥルム、ハンス＝ペーター・ツィンマー とともにS Iドイツ・セクションシュプール派のメンバー。ラウゼン(63年10月にS Iを除名)を除き、1962年2月にS Iを除名

*2: ジョン・オズボーン(1929-) イギリスの劇作家。1956年初演の『怒りをこめてふりかえれ』で一躍有名となり、「怒れる若者たち」の代表的作家とされた

*3: コリン・ウィルソン(1931-) イギリスの批評家。1956年、24歳で哲学エッセイ的な文芸批評『アウ

トサイダー』を発表し、世界的に有名になる。翌年、『宗教と反逆者』を発表した後、神秘主義やSF的傾向の色濃い作品を次々に発表し、「怒れる若者たち」の1人と目された。評論に『敗北の時代』（59年）、『オカルト』（71年）、長編小説に『暗黒の祭り』（60年）など

*4：ロベール・カンテール（1910－85年） ベルギー出身の批評家。『レクスプレス』、『フィガロ・リテール』などの雑誌で劇評・文芸批評を担当し、多くの文学賞の選考委員を務めた。著書に『失われたパリリ』（46年）、『神秘主義文学選集』（アマドゥーとの共編、50年）など

訳者解題

後の付記にあるように、この論文はアスガー・ヨルンがS Iを脱退する直前に書いたもので、ここへの掲載の時点では、彼はもはやS Iのメンバーではない。にもかかわらず、ここにヨルンの論文が掲載されたのは、ヨルンという人物とS Iとの特別なとも言える関係があったからである。ヨルンの脱退は、S Iの多くの除名・脱退者のどの例とも異なり、意見の不一致やS Iの理念を逸脱した活動が原因ではない。『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第6号の「シチュアシオニスト情報」には、その原因は「S Iの組織的な活動への参加を今後きわめて困難にしている個人的事情」であり、ヨルンは「彼とS Iの完全な意見の一致」を見ていると書かれている。この「個人的事情」が何であるかは不明である。しかし、いくつか考えられることとして次のようなものがある。まず、ヨルンが画家としてすでに有名であり、その行動にジャーナリスティックな注目が集まることがS Iの活動に障害となったこと、次に、ヨルンがこの時期、その絵画製作活動を活発化させ、従来の「修正絵画」の他に、「ラグジュアリー・ペインティング」、「ヌーヴェル・デフィギュラシオン」など自らが編み出したさまざまな新しい方式の絵画製作を開始したこと、そして、故郷のシルケボアに私財をはたいて開設した美術館のための絵画・彫刻の収集を本格化させたこと、最後に、コブラの時代から抱いていた古代北欧文化への関心を発展させ、古代スカンディナヴィア文化に関する総合的な資料センター〈比較ヴァンダリズムのためのスカンディナヴィア研究所〉の設立に奔走し始めたことである。特に〈比較ヴァンダリズムのためのスカンディナヴィア研究所〉の活動のために、ヨルンは自費でフランスの著名な写真家ジェラルド・フランセッシを雇ってスカンディナヴィア各地で総計2万5千枚の写真を撮らせ、この研究所の名前で何冊かの書物を出版し、何本かの映画製作に資金を提供するなど、精力的に活動している。

これらのヨルンの個人的な関心に基づく活動とS Iの組織内での活動とは敵対しないまでも相容れないものであったがゆえに、ヨルンはS Iを脱退することに決めたのだと思われる。そのため、S Iの脱退以降もヨルンは他の除名・脱退者のようにシチュアシオニストからの批判を受けることはなかった。ヨルンはS Iを脱退後も、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌発行のためにS Iに対して資金援助を続けるほか、ドゥボールの映画シナリオ集『映画に反して』に序文を寄せて〈比較ヴァンダリズムのためのスカンディナヴィア研究所〉から出版するなど、むしろS Iと良好な関係を保っている。

ヨルンは、その後、美術界とは距離を置きつつ（例えば、64年には美術界最高の賞の1つであるグッゲンハイム賞を拒否したり、68年5月には革命下のパリで異議申し立てのポスターを製作したりしている）、パリやアルピソラで陶芸や建築レリーフ、絵画などさまざまなジャンルでの芸術活動を行うとともに、ミュンヘン、ミラノ、コペンハーゲン、ロンドン、ニューヨーク、ハバナ、ブリュッセル、ベルリンなど世界各地の都市で個展や回顧展を開催するが、1973年に肺癌のため故国デンマークのオールフスの病院で59歳で死去する。ドゥボールは、ヨ

ルンが生前イタリアのアルビソラに建設していた館——内装から外壁、庭園にいたるまですべてヨルンの絵画や陶芸、タイルで装飾された一種の理想宮——の写真集『アルビソラ庭園』（ヨルンの死後、1974年にトリノのエディツィオーニ・ダルテ・フラテッリ・ポッツォから出版）のために、「野生の建築について」という文章を寄せ、その中で「ヨルンは成功によっていささかも変わらず、成功をたえず別の掛け金に変え続ける者たちの1人だ」とヨルンを賞賛している。

宗教の歴史は3段階から成りようである。いわゆる物質主義的宗教ないし自然宗教は、青銅器時代に完成の域に達していた。形而上学的（メタフィジック）宗教は、ゾロアスター教とともに始まり、ユダヤ教、キリスト教、イスラームを通じて発展し、16世紀の宗教改革運動に至っている。そしてついに、今世紀の初め、ジャリ*1のイデオロギーとともに、第3の種類、新たな宗教の基礎が築かれた。それは、22世紀頃には、世界全体を支配するかもしれない。それがパタフィジック教である。

今日まで、パタフィジック*2の企てにその宗教的な意味のすべてが活用されてきたわけではないが、それはただ、パタフィジックが、内輪で『カイエ・デュ・コレージュ・ド・パタフィジック』誌*3を長く継続して発行していた信者たちの小さなサークルの外では、いかなる意味も持っていなかったからにすぎない。

パタフィジックを世界で紹介した栄誉は、アメリカ人に帰する。つまり、パタフィジックの暴君たちに語らせた雑誌『エヴァーグリーン』の特別号のことである。もちろん、そこでは、宗教という語が公然と発せられているわけではない。しかし、それが昨年アメリカのインテリゲンチヤのあいだで収めた成功は、この新しい現象を客観的に分析する時期が始まったことを告げている。この結果、ほどなく誰もが問題の所在を知ることになるだろう。

自然宗教は、物質的生活を精神的に確認するものであった。形而上学的宗教は、物質的生活と精神的生活の間の対立——それは常により深くなっていたが——が確立されたことを表していた。さまざまな形而上学的信仰は、こうした分極化におけるさまざまな段階を示すものである。自然宗教の祭式や礼拝への愛着のために、この分極化は困難であり遅れがちであったが、しかしそれらの祭式や礼拝は、多かれ少なかれうまい具合に、形而上学的宗教の礼拝や祭式や神話に姿を変えた。科学的な形而上学がすでに圧勝した時代にこうした文化的神話体系（ミトロジー）が存在することの不条理は、キルケゴールが、不条理を信じねばならないというキリスト教の堅信の秘跡〔聖霊の恩恵を与えて、信仰のあかしを立てる力を授ける秘跡〕を例に挙げて、明確に示した。次の問いは、では何故というものであった。その自明の答は、世俗の政治的・社会的権威は、自らの権力を精神的に正当化し続けるためにそれを必要としていたというものである。これは、古い神話体系すべてが根本的に批判され始めた時代における、純粋に物質的で反形而上学的な議論であった。

しかしながら、あらゆる方面から、新たな社会的要請に応えられる新たな神話体系が必要とされていた。まさにそうした形而上学的な引込線のかかに、シュルレアリスムや実存主義、そしてレトリズムもまた、消えていった。この努力を辛抱強く続けた古典的レトリストは、どんどん——後ろ向きに——進んでいき、現代的で普遍的な信仰とは相容れなくなったあらゆる要素をせつせと収集するようになった。すなわち、メシアとか、さらには死者の甦りとかいった観念の復活であり、つまり、信仰の一方向的な性質を保証するものすべてである。政治屋が一瞬にして世界の終末を引き起こす手段を所有するようになって以来、最後の審判と何らかの関係があるものはすべて、国家的になり、完璧に世俗化された。物理的（フィジック）世界に対する形而上学（メタフィジック）的な反対は決定的に潰えた。闘いは完全な敗北に終わったのである。

この論争の唯一の勝者は、真理の科学的な基準である。宗教の真理か科学的真理と呼ばれるものと対立するなら、もはや宗教を真理と考えることはできない。そして、真理を表さない宗教は宗教ではない。パタフィジック教が乗り越えようとしているのは1つの対立*4である。パタフィジック教は、現代科学の基本概念的1つ、すなわち、同等なもの〔=等価なものequivalents〕の不変性という概念を、絶対的なもののレベルに位置づけたのである。

キリスト教によってもたらされた、神の前では人は同等であるという考えによって、同等なもの理論のための下地はすでにできていた。しかし、その原則は、もっぱら科学と産業の発達にともなってはじめて、生活のあらゆる分野において必然となったのであり、また、科学的社会主義とともに、すべての個人の社会的同等性へと至ったのである。

同等性の原理は、精神世界において、もはや軽視できなくなっていた。そのことが、科学的シュルレアリスムの計画をもたらしたのであり、それはすでに、アルフレッド・ジャリの諸理論のなかで素描されていた。キルケゴールの不条理という概念に、ただ、諸々の不条理の同等性（神々相互の同等性、そして、神々と人間と諸事物の間の同等性）という原理が付け加えられただけである。こうして、未来の宗教の基礎が築かれた。自分の陣地では無敵の宗教である。その宗教、すなわちパタフィジック教は、過去・現在・未来のありうる宗教もありえない宗教もすべてひくくめて無差別に包含しているのである。

もし、その宗教が世間にまったく気づかれずに済むということがありえたならば、また、パタフィジックの信仰が匿名で伝授され、決して批判を受けなかったならば、解決不可能に見えるパラドックスが生じることもなかったであろう。そのパラドックスとは、パタフィジックの権威の問題、神聖化不可能なものの神聖化というパラドックスである（つまり、パタフィジックが、他のさまざまな宗教のあとを受けて、同じ役割のもとに、社会生活のうちに出現したことである）。実際、この特殊な宗教は、同時に反パタフィジックにならなくては、社会的権威になりえない。そして、社会的に認められているものはすべて、ただ社会的権威ということからのみ、その権限を得ているのである。そういうわけで、パタフィジック教は、普及している形而上学的体系すべてに対して優位にあるにしても、知らず知らずのうちに、自らのその優位性の犠牲となるおそれが多分にある。というのも、優位性と同等性の両立が不可能なことは確かなのだから。

パタフィジックの功績は、次のことを確証したことにある。すなわち、すべての人々に、同一の不条理を信じるよう強要することには、いかなる形而上学的正当性もない、ということである。不条理なものとは芸術の可能性は多様である。この原理の論理的な帰結は、各人各様の不条理が

あるというアナーキーなテーゼとなろう。これと逆のことを表現しているのが法的権力であり、それは、社会の全構成員が国家の政治的不条理の規則に全面的に従うことを強要するものである。

しかしながら、現在形成されつつあるようなパタフィジックの権威を容認することは、パタフィジックの精神に対する新たなデマゴギーの武器になる、と言わなければならない。パタフィジックの綱領（プログラム）そのものが、パタフィジックの組織の存在を阻むのであり、パタフィジック教会などというものをありえぬものとしているのである。

社会生活においてパタフィジック的な状況を創り出すことが不可能であるということはまた、パタフィジックの名において何らかの運動ないし社会状況を創り出すことも不可能にしている。その理由はすでに述べた。すなわち、同等性とは、状況や出来事概念をすべて完全に排除するのである。

それでもやはりパタフィジックが、外部から、ある種の文化状況のうちに位置づけられている今、この基本定義から引き出される不可避の結果は、必然的に、パタフィジックの信者らのなかに分裂を引き起こすであろう。すなわち、純然たる反シチュアシオニストと、パタフィジック的な同等性の基礎の上に立ちながら、遊びと呼ばれる組織的な不条理を発展させることに賛成する者との間の分裂である。

遊びは、世界へ向けてのパタフィジック的な開口部であり、そのような遊びの実現とは、状況の創造である。それゆえ、パタフィジックの信奉者のだれもが出会う致命的な問題によって、1つの危機が引き起こされる。その問題とは、社会のなかで活動を始めるためにシチュロジー*5の方法を適用するか、それとも、いかなる状況のなかでも行動することをきっぱりと拒否するか、どちらかを選ばねばならないという問題である。この後者の場合に、パタフィジックは、まさに、スペクタクルの現代社会に正確に適応した宗教になる。それは、受動性と純然たる不在の宗教である。

これに劣らず重大な問題が存在する。その問題は、反組織者の組織、すなわちシチュアシオニスト・インターナショナルを選ぶことを要請する。S Iは、パタフィジックの原理を反形而上学的方法として完全に適用することができる。それを直接なしとげるには、新しい遊びを確立せねばならない。優位性の不条理と不条理な優位性が、この遊びの鍵である。そして、権威が、この遊びの本質的な対象である。出発点として同等なもの原理を適用することによって、遊びは自由なものとなる。すなわち、一見まったく優位性と権威にしか見えないもののなかに、状況を完全に構築することができるのだ。しかし、その逆に、どんなものであれ形而上学的な基礎が選ばれるなら、シチュロジーは、自動的に、権威主義的に管理される大衆的な気晴らしの方法のレベルに墮してしまうだろう。そうすると、食物（パン）と見世物（スペクタクル）〔が必要だ〕という隷属の古典的決まり文句の繰り返しになってしまう。

外には知られていないさまざまなサークルでの長い熟成期間の後に、新しい遊びの基本要素が、今、姿を現しつつある。それは体制を補完する要素なのか、体制の敵となる要素なのかは、将来の発展だけが教えてくれるだろう。

アスガー・ヨルンは、S Iからの脱退の直前に、本稿や他のいくつかの発言を通じて、シチュアシオニストに、パタフィジック・イデオロギーの宗数的な影響力の危険性を警告することに努めていた。パタフィジック・イデオロギーは、『エヴァーグリーン・レビュー』の編集部の方針変え以来、米国で大いに広まっていたのである。

パタフィジック・イデオロギーは、現代芸術のさまざまな企てに参加していた何人かの年寄りに支えられているが、それ自体、今世紀前半の「現代芸術」の老化の産物である。パタフィジック・イデオロギーは、極端に停滞して非創造的な冗談のなかに、「現代芸術」の原理を、冷凍保存しているのである。パタフィジック・イデオロギーは、世界を容認し、そうすることで、他のあらゆる宗数的失望の跡を継いでいる。B・ヴィアン*6は、ラジオで次のように述べていた（『カイエ・デュ・コレージュ』誌 第12号を参照のこと）。「パタフィジシアンは、実のところ、道徳的である理由もなければ、道徳的でない理由もない。だからこそ、パタフィジシアンだけが唯一、順応主義者に落ちぶれることなく今でも誠実でいられるのである」。

言うまでもなく、ヨルンが思い描いた〔パタフィジシアンとシチュアシオニストとの〕出会いの可能性は、最も聖職者的でないパタフィジシアンたちの分派・転向という彼の展望のもとでしか考えられない。S Iは、どんな宗教も、他の宗教と同じく、お笑い草であると思われ、あらゆる宗教に等しく敵意を持つことを断言する。たとえそれが、サイエンス・フィクション教であっても。

*1: アルフレッド・ジャリ（1873-1907年） フランスの劇作家、小説家。戯曲『ユビュ王』（1896年初演）などで、不条理な暴力を体現し、破壊的な笑いを誘う主人公ユビュ親父を創造した

*2: パタフィジック ジャリの造語。小説『フォーストロール博士言行録』（1898年頃作で死後の1911年刊）でジャリ自身が次のように定義している。「付帯（エビ）現象とは、現象にさらに付け加わっているものである。パタフィジックの語源はエビ（メタ・タ・フジカ）と記されるに違いない〔訳注。エビもメタも「～の後に来るもの」を示す接頭辞〕（中略）。パタフィジックは、形而上学（メタフィジック）に——その内部にであれ外部にであれ——さらに付け加わっているものの科学であり、形而上学が物理学（フィジック）を超えて先へ広がっているのと同じだけ、パタフィジックは形而上学を超えて先へ広がっている。そして、付帯現象はしばしば偶然の出来事であるから、パタフィジックは——科学と言えるのは普通の科学だけだと言われようとも——特殊の科学になるであろう。パタフィジックは、例外を支配する諸法則を研究し、この世界に追補される世界を解明するであろう。（中略）定義——パタフィジックは、虚数解の科学であり、仮想性によって記述される事物の輪郭と属性とを象徴的に一致させるものである。」

*3: 『カイエ・デュ・コレージュ・ド・パタフィジック』 コレージュ（研究機関、幹部会）・ド・パタフィジックは、『ロベール大辞典』『トレゾール大辞典』によれば、「ジャリの想像上の産物である『終身管財人（フォーストロール博士）と選挙で選ばれる副管財人によって運営され、コレージュの正教授職の座を占める摂政たちからなる機関』であるが、現実には、伊東守男氏によれば、1948年、レイモン・クノーらによって創立された、ジャリのパタフィジックに共鳴する人たちを集めた結社である。ジャリを始めとし、ネルヴァル、ボードレール、ランボーらの研究をする学術団体のようなものであるが、実際はピラミッド型のヒエラルキーを持った半秘密結社である」（早川書房版『ボリス・ヴィアン全集』第1巻の訳者解説より）。『カイエ・デュ・コレージュ・ド・パタフィジック』はその機

閑誌である。

*4：1つの対立 「1つの対立」は「この対立」の誤植。

*5：シチュロギー アスガー・ヨルンの造語。シチュアシオニストの論理、もしくはsitu（場）に関する論理を指すと思われる。ヨルンの論文「開かれた創造とその敵」を参照。ここではシチュロギーは、トボロジー、シチュグラフィーなどと関連づけて詳しく論じられている。

*6：ボリス・ヴィアン（1920－59年） フランスの作家。その活動は、ジャズ・トランペット奏者、作詞・作曲家、歌手、俳優、レコード会社のディレクター、自動車技師など、非常に多方面にわたる。文筆関係でも、小説・戯曲・詩の創作にとどまらず、音楽評論や、アメリカのミステリー・SFの翻訳なども手がけた。代表作とされる小説『日々の泡』（邦訳題名は、他に『うたかたの日々』もある）（47年）は、発表時にはほとんど無視されたが、彼の死後の60年代に、驚異的なミリオン・セラーとなった。なお、ヴィアンは、1952年に、コレージュ・ド・パタフィジックに正式加盟している。

コメントを書く

ある専門家——シオンバール・ド・ローヴェ*1——の意見では、正確な実験によって、次のことが確証されているようだ。すなわち、計画立案者によって提案された計画は、場合によっては、不満と反乱を引き起こすが、そうした不満や反乱は、もしわれわれが人々の現実の行動と、とりわけその行動の動機についてより深い知識を持っていたならば、部分的には避けることができたかもしれない、ということだ。

都市計画の偉大と屈従。われわれが執拗に疑い深く都市計画立案者のいかがわしさを嗅ぎつけた時には、すでに誰もが、こうした價例破りや不作法に直面したときにふさわしいやり方で、顔を背けてしまっていた。ここで民衆の判断を非難する必要はない。民衆はそれまでにもすでに、同じ不しつけさで態度を明らかにしていた。すなわち、「建築家の野郎！」という言葉は、ベルギーではこれまでずっと、明白な〔軽蔑の〕言葉だった。だが、しかじかのエキスパートが今日、俗世間の意見に同調し、彼自身も計画立案者のいかがわしさを嗅ぎつけだしたからには、われわれはやっと救われたのだ！ かくして、都市計画家こそが、不満と反乱を煽り立てる、それも「ほとんど」第一次的扇動者として煽り立てるのだと、公式に認められた。公権力のすみやかな反応を願わねばならない。反乱の温床が、それを取り除くことを任務とする者自身によって公然と維持されるなどということは、考えられないことだからである。そこにあるのは、軍法会議だけが決着を付けられるような、社会平和に対する犯罪である。正義が自分と同列のものに対して厳罰を持って臨むなどということは見られないだろう。そのためには、エキスパート自身が、結局、狡猾な都市計画家でなくてはならなくなってしまう。

計画立案者が、できるだけ精神の均衡を保って住まわせようと望む人々の行動の動機を知ることができないなら、そんな都市計画は即座に犯罪研究センター（扇動者——前記参照——を捜し出し、誰もがヒエラルキーのなかで安心していられるようにするもの）の一部門にしてしまった方がましだ。逆に、計画立案者が本当にその動機を知ることができるなら、犯罪抑止の科学は、存在理由を失い、社会的根拠を変更することになる。その場合には、機関銃というデリカシーを欠く手段の助けを借りなくても、都市計画だけで十分、既成秩序を維持できよう。コンクリートと同一視された人間、それはテクノクラートたちにとって、なんという夢、あるいは、なんと幸せな悪夢であろうか。たとえ彼らがそこで、自分たちに残された〈高度神経活動〉を失い、コンクリートの権力と硬さのなかに保存されることになろうとも。

もしナチスが現在の都市計画を知っていたなら、強制収容所をHLM（アッシュェレム）〔公団アパートのような低家賃住宅〕に変えたことだろう。しかし、この解決策は、シオンバール・ド・ローヴェ氏にとっては、あまりにも乱暴に見えるようだ。理想的な都市計画は、誰をも、不満も反乱もなく、人間の問題の最終的解決のほうへ引き入れるものでなければならない。

都市計画は、悪夢の最も完璧な具体化である。悪夢とは、リトレ〔19世紀フランスの辞典〕によれば、「極度の不安の後にはっとして目を覚ますことと終わる状態」である。しかし誰に対してはっとするのか。眠くなるまでわれわれにむりやり食べさせた者に対してか？ アイヒマンを処刑することは、都市計画家を絞首刑にするのと同じくらい馬鹿げたことだろう。それは、射撃演習場のまっただ中にいるときに標的を批判することだ！

計画化とは、大げさな言葉である。野卑な言葉だ、と言う人もいる。専門家は、経済の計画化と計画化された都市計画について話し、それから訳知り顔に目配せする。そして、演技がうまくなされる限りは、みんなが拍手喝采する。見せ物（スペクタクル）の目玉は、幸福の計画化である。すでに、数字好きな者が調査を実施し、正確な実験によってテレビ視聴者の数が確定されている。視聴者の周りの地区を整備し、視聴者のために建設し、視聴者の気をそらせないように、眼と耳を使って彼らの関心に糧を与えておくためである。すべての人々に、平和な生活と心の均衡を保証する必要がある。それも、漫画の海賊が「死人に口なし」という宣告のなか示していた適切な先見の明をもって。都市計画と情報とは、資本主義社会でも「反資本主義」社会でも、相互補完的である。それらは沈黙を組織するのだ。

住むことは、都市計画が掲げる「コカコーラを飲もう」というスローガンである。飲む必要が、コカコーラを飲む必要にすり替えられている。住むということは、どこでも自分のところにいることだ、とキースラー*2は言う。しかし、そのような預言的な真理は、誰の首根っこもつかまえない。そのような真理は、たとえ輪奈結び〔ネクタイのように、ひもを滑らせて結び目を調整できる結び方〕を思わせるところがある〔=融通無碍である〕としても、だんだん厳しくなってくる寒さに対してのスカーフにすぎない。われわれは住まれている〔=取りつかれている〕。まさにこの点から出発しなければならない。

広報活動（パブリック・リレーション）としての理想的な都市計画は、紛争のない社会的ヒエラルキーを空間のなかに投影したものにほかならない。道路、芝生、自然の花、人にの森は、付属の歯車に油を注し、隷属を心地よいものにする。イヴ・トゥーレーヌの空想小説では、国家は、年金労働者にさえ、電子マスターベーション器を与える。経済と幸福は、そのことで利益を得るのである。

なんらかの威厳ある都市計画が必要だ、とシヨンバール・ド・ローヴェは主張する。彼がわれわれに提案するスペクタクルは、オスマン*3も時代遅れにする。オスマンは、砲弾の屈く範囲〔パリ市内のこと〕の外でまでは威厳に気を配ることはできなかったのだから。今度の主題は、日常生活の上でスペクタクルを演劇的に組織し、誰もが資本主義社会によって課せられた役割に応じた枠のなかで生きるようにし、そして、誰に対しても、まるで眼の見えない者のように、自分自身の疎外を現実化することに幻想的に自己を認識するよう教育し、誰もがますます孤立するようにさせることである。

空間の資本主義的教育とはひとが、自分の影を失う空間、自分でないもののうちに自己を激しく探し求めるせいで自己を見失ってしまう空間における教育にほかならない。どんな教師にも、無知を組織するどんな業者にとっても、なんとも見事なねばり強さの例である。

ある都市の図面、その道や壁や街区はそれぞれが、奇妙な大衆操作の記号を成している。そこに、どのような記号をわれわれのものとして認めたらよいのか。いくつかの落書き（グラフィティ）である。それらは、大急ぎで刻まれた拒否の言葉や禁じられた身振りだが、衡学者に分かるのは、化石となった都市のなか、ボンペイの壁に刻まれた落書き（グラフィティ）の重要性ぐらいだろう。だが、われわれの都市は、ボンペイよりもはるかに化石化している。われわれは、馴染み深い国で、日々の友人のように生き生きとした記号に囲まれて住みたいと思う。革命と

はまた、万人に属する記号を永続的に創造することでもあるだろう。

都市計画に関するすべてのことには、信じがたい重苦しさがある。建築する〔＝構築する construire〕という語は、他の語が浮かんでいる水のなかに、まっすぐ沈んでしまう。官僚主義（ビューロクラシー）文明が広まったところではどこでも、個々に無秩序に建築することが、公式に是認され、権力の所轄機関がそれを引き受けてきた。その結果、建築〔＝構築〕の本能は、悪として根こそぎにされ、今ではほとんど、子どもや未開人（行政用語では、責任無能力者）のうちか、人生を変えることができないので、あばら屋を壊したり建て直したりすることに人生を費やしているすべての人々のうちにしか生き残っていないのである。

安心させる技術、それを都市計画は最も純粋な形で実行しようとしている。それは、まさに精神を全面的にコントロールしようとする権力の最後の礼儀である。

神と都市。抽象的で実在せぬ勢力はどれも、都市計画ほどうまく、神の跡を継ぎ、誰もが知る〔神の〕死によって空位となった門番の地位につくことを要求できなかった。その遍在性、その測り知れぬ善、そして、おそらくいつの日かその至高の権力をもってすれば、都市計画（またはその案）は、教会を脅かすに足るものを持って不思議ではないかもしれない。ただしそれは、権力の正統性に関する疑念が都市計画に少しでもあるとしたら話である。だが実際は、そんなものはまったくない。というのも、教会は、権力である以前に「都市計画」でもあったからである。教会は、在俗の聖アウグスティヌス*4などというものがいたとしても、何を恐れることがあるだろうか。

最後の審判の希望までも奪われる何千もの存在を「住む」という言葉のなかに共存させることには、何か見事なものがある。その意味において、見事さが非人間性を飾っている。

私生活を産業化すること。「あなたの生活をビジネスにしたまえ」というものが、新たな標語になるだろう。自らの生活環境を、経営すべき工場として、すなわち、機械の代替物と、高級なイメージの生産と、壁や家具という不変資本とを持つミニ企業として、組織するよう、各人に提案することは、本当の大工場——それは、やはり生産を行わなければならないのである——を所有する御仁の悩みの種を完璧に理解できるようにするための最良の方法ではないだろうか。

地平を均一化すること。壁やわざとらしい小緑地は、夢と思考に、新やな限界を設ける。というのも、砂漠がどこで終わるのかを知ることは、やはり、砂漠を詩的に美化することだからである。

新しい都市は、伝統的な都市とそれが抑圧しようとした人間との間の対立としてあった闘いの痕跡までも消し去るだろう。すべての人々の記憶から、それぞれの日常生活にはそれぞれの歴史があるという真実を完全に取り除くこと、そして、体験の単純化が不可能であることを参加の神話において否定すること、そんな風に、都市計画家たちは、自らの追求する目的を言い表すことができるかもしれない。もっともそれは、彼らが自らの思考の邪魔をする真剣さの精神を少しのあいだ遠ざけておいてくれるとしての話だが。真剣さの精神がなくなるとき、空は明るくなり、すべてがより鮮明になる、というより、ほとんどそうなる。たとえば、ユーモアを解する者ならよく知っているように、敵を水爆で破壊することは、自らに、より長い苦しみの後の死を宣告することである。都市計画家たちが自分の企んでいる攻撃のなかに自分自身の自殺のあらすじを把握できるようにしてやるには、彼らをいつまでも嘲弄し続けねばならないのだろうか。

墓地は、考えうる最も自然な緑地帯であり、最後の失われた楽園として、未来の都市の枠内に調和よく溶け込める唯一のものである。

原価は、建設する欲望に対する障害であることをやめなければならない、と左翼の建築家は要求する。彼は安らかに眠るがよい。やがて、建設する欲望が消えてしまった時には、そうなるだろう。

フランスでは、建築を機械工の遊びにする方式が発達した（J＝E・アヴェル）。ことをできる限りうまく運ぶためとはいえ、セルフ・サービスの店とは、フォークが食べるのに役立つ（サーヴ）という意味で人が役立つ（サーヴ）場所ではない。

マキャヴェリズムを鉄筋コンクリートに混ぜることによって、都市計画は、良心に恥じるところがないつもりでいる。われわれは、警察的なデリカシーの王国に入っている。威厳のなかで隷属させること。

信頼のなかで建築すること。広々としたガラス窓の現実でさえ、虚構のコミュニケーションを隠さない。公共の場の雰囲気ですえ、私的な意識の絶望と孤立を暴く。空間を忙しく埋めることでさえ、ロスタイムによって測られる。

現実主義的都市計画のための案。ピラネージ*5の階段をエレベーターに置き換える。墓をビルディングに変える。下水渠沿いにプラタナスを植える。ごみ箱を居間に改造する。バラックを積み重ねる。そして、すべての都市を美術館状に建設する。つまり、あるものすべてを、さらには無いものまでも、活用するのである。

疎外は手の届くところにある。都市計画は疎外を触知できるものにする。飢えたプロレタリアートは、動物の苦しみの中で疎外を体験していた。われわれは、事物の盲目的な苦しみのなかで疎外を体験するようになるだろう。手探りで、自分が違うものであることを感じることに。

まっとうで炯眼の都市計画家たちには、柱頭行者*6の勇気がある。われわれは、彼らの願望を正当化するために、われわれの生活を砂漠にするのだろうか。

哲学的信念の擁護者は、20年ほど前から労働者階級の存在を発見していた。社会学者が口を揃えて、労働者階級はもはや存在しないと公言しているとき、都市計画家たちは、哲学者も社会学者も待たずに、住民を発明してしまった。彼らがプロレタリアートの新たな次元を最初に見抜いた人々の一員だったという栄誉で、彼らを讃えなければならないだろう。それは、彼らが、最も柔軟な調教方法で、社会のほとんど全休を、乱暴なやり方でではないが徹底的にプロレタリア化する方向へ導くすべを知っただけに、いっそう正確で非抽象的な定義である。

廃墟の建設者たちへの意見。都市計画家たちの跡を継ぐのは、スラム街とバラックに住む最後の穴居人たちだろう。ベッドタウンの特権者たちは、壊すことしかできないのに対して、彼らは建築するすべを知っている。そのような出会いに多くを期待しなければならない。そのような出会いが革命を規定するのだから。

聖なるものは、価値を失って、神秘になった。都市計画は、〈大建築家（グランタルシテクト）〉〔＝神〕の究極の失墜なのである。

テクノロジーのうぬぼれの背後に隠されているのは、ひとつの明らかにされた真実であり、そのようなものとして異論の余地のないものである。すなわち、「住む」必要がある、ということである。このような真実の性質に関して、浮浪者は、何で満足しておくべきかをよく知っている

。浮浪者は、ごみ箱——住むことを禁じられているので彼はそこで生きざるをえない——の間で、生を築くことと住居を築くことは、およそ考えうる真実の唯一の面である実践においては、どれほど区別できないかが、おそらく誰よりもよく分かっている。しかし、この文明世界が浮浪者を追放の身にしているせいで、彼の経験は非常につまらぬ非常に困難なものにされ、それゆえ、建築家はそこに、——ばかげた仮定だが、権力が建築家の存在を保証するのをやめれば——、自己を正当化する口実を見いだすであろう。

労働者階級はもはや存在しないようである。かつてのプロレタリアの多数が、今日では、昔は少数の者だけに許されていた快適さを獲得している。これは周知のことだ。しかしながら、むしろ、量的に増加していく快適さこそが、彼らの需要を獲得し、彼らに需要の欲望をもたらしているのではないだろうか。その結果、快適さのある種の組織化が、伝染病のようにして、モノの力によって感染するすべての人々をプロレタリア化しているようである。ところで、モノの力というものは、責任ある指導者たちや抽象的な次元に往む司祭たちを介して力を及ぼすものである。彼らの唯一の特権は、遅かれ早かれ、ゲッターに囲まれた行政的中心地を支配することに帰するであろう。最後の人間は退屈で死にそうになるだろう。ちょうど、蜘蛛が自分の巣の真んかで衰弱死するように。

急いで建設する必要がある、住まわせるべき人々がたくさんいるのだから、と鉄筋コンクリートの人間主義者たちは言う。ただちに塹壕を振る必要がある、祖国全体を救わなければならないのだから、と将軍たちは言う。前者を称賛して後者をあざ笑うのは、何か不当なことではないだろうか。ミサイルと大衆操作の時代に、将軍たちの冗談は、いまなお趣味のいい冗談だ。しかし、それと同じ口実で、空中に塹壕を築き上げるなんて！

ラウル・ヴァネーゲーム

*1：ポール＝アンリ・ションバル・ド・ローヴェ（1913－） フランスの都市社会学者。著書に『労働者家庭の日常生活』（1956年）、『文化と権力』（75年）など。

*2：フレデリック・キースラー（1890－1965年） オーストリアの芸術家。環境という観点から建築と美術を再検討し、近代建築を批判して、独自の住宅プラン「エンドレス・ハウス」（1949－60年）を考案した。

*3：ジョルジュ＝ウージェーヌ・オスマン男爵（1809－91年） フランスの政治家。第二帝政期にセーヌ県知事としてパリの都市改造を行った。公園の建設、大通りの開通、上下水道の整備などをともなうこの都市改造は、1848年の2月革命時の革改革派の拠点となった古い市街を破壊し、軍隊の移動と地区の監視に好都合な広くてまっすぐな大通りを放射線状に配置するという政治的な意図を持つものであった

*4：聖アウグスティヌス（354－430年） 初期キリスト教会の教父・哲学者。著書に『告白』『神の国』。

*5：ピラネージ（1720－78年） イタリアの版画家・建築家。クロード・ロランの風景画の影響を受け、古代ローマの廃墟や遺跡をもとにした幻想的な版画を作った。代表作に『ローマの景観』（1756年）、『古代ローマ』（56年）のほか、『想像の牢獄』（50年）が特に有名で、そこに描かれた牢獄のなかの階段は幾重にも重なり、迷路

のようになっている

*6：柱頭行者 柱の上で修行したキリスト教の苦行者。最初の柱頭行者はシリアのシメオン（4世紀頃）で、通常の修行方法に満足せず、他人に邪魔されないように柱に上ったらしい、その後5世紀から10世紀にかけて、シリアやメソポタミアなどに広まった。

昨冬発行された雑誌『ディセント』（第8巻 第1号）のある記事の冒頭で、エドウィン・M・シュアー*1は、妄想を帯びた驚きをもって述べている。「麻薬にふける者は、しだいに現代のスケープゴートであると同様に前衛の英雄にもなっている。ジャック・ゲルバー*2、ウィリアム・バロウズ*3、アレクサンダー・トロッチ*4らのしていることは、『ジャンキー〔麻薬常用者〕』の生活に寄せられる関心を刺激した。これらの反逆者は、ノーマン・メイラー*5によれば、麻薬の使用が新しいラディカリズムの一部になっているとさえ考えているようであり、彼らの頭のなかでは、厳密に政治的な反対派が何ももたらさないことによって正当化されているらしい！ 実際、これこそが、『イデオロギーの終焉』を、恐ろしいやり方で具現するものであろう……」

われわれの同志アレクサンダー・トリッチは、幸いにも、1961年の末にヨーロッパに戻ることができた。『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』の編集部には、噂どおりに彼が仮釈放を利用してニューヨーク警察の迫害から逃れ、密かにカナダ国境を越えたのかどうかを、公式に確認することはできない。しかしながら、起訴のおぞましい愚劣さがシチュアシオニストの2つの刊行物によって明確に証明されたにもかかわらず、彼の事件においていかなる免訴も結局言い渡されなかったことは、われわれにも断言できる。

*

現代社会は現在その拠点を、高度に工業化した20カ国に置いている。そこではまた、現代社会の変容のあらゆる傾向と、現代社会の危機の本質的な現象が、産み出されている。それは、ドイツ、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、カナダ、デンマーク、合衆国、フィンランド、フランス、英国、オランダ、イスラエル、イタリア、日本、ノルウェー、ニュージーランド、ロシア、スウェーデン、スイス、およびチェコスロヴァキアである（このリストは、核兵器を製造するのに十分な技術力を持つ国のリストに、ほとんど正確に一致する）。シチュアシオニスト運動はすでに、これら20カ国のうちの11カ国、すなわち過半数の国に広がっている。これらの国の大半をなすヨーロッパだけを分けて、その細目を計算してみると、3分の2に近い割合にまで達する。というのも、シチュアシオニスト運動の定着はヨーロッパ地域から広がったので、そこでは14カ国のうち9カ国に達しているからである。

*

1月にミュンヘンで、われわれの同志が攪乱しに行ったあるモダニスト文化イベントの際に、S I ドイツ・セクションとスウェーデン・セクションの共同声明『前衛は受け入れられない』が発表された。その文書は、〔ドイツ・セクション側〕ではクンツェルマン、プレム、シ

ユトウルム、ツインマー、他方〔スウェーデン・セクション側〕ではステファン・ラーソン、K・リンデル*6、J・ナッシュが署名し、ビラにして大衆にばらまかれたのであるが、それは次のことを再確認するものであった。「前衛が生活の重要性そのものを問題にし、その分野で要求を実現しようとするならば、それは、あらゆる社会的可能性から切り離されることになる。前衛の美的副産物である絵画、映画、詩などは、すぐに人々に望まれるものとなるが、しかし、それらには何の効果もない。人々に受け入れられないもの、それは、生活条件を完全に一新する方針である。そうした方針は、社会を根底から変えようとするのである」。

それより少し前に、ドイツ・セクションは、祝祭に関する宣言を発表していた。それはなかなく次のことを表明している。「権力側のあらゆる制度とあらゆるしきたりを、失敗したゲームと見なして、ボイコットせよ。(……)祝祭、それは人民の不人気な芸術である。創造的であること、それは、絶え間ない再創造を通じて、ありとあらゆるものを用いて祝祭を行うことである。科学から革命を演繹したマルクスと同じように、われわれは祭から革命を演繹する。(……)祭なき革命は革命ではない。祭の力なしに芸術の自由はない。(……)われわれは、最大限の真剣さをもって、遊びを要求する」。

*

S I 中央評議会は、パリで1月6日から8日にかけて、2回目の会合を開いた。その討議の大部分は、実験都市の建設の検討に充てられたが、それはイタリアのある文化センターが提案したいくつかの条件から始まった。S Iは、その地域の生活様式全体の改造について建築者に権利を認めるという展望のもとでしか、その折衝を続けられないことを認めた。それに加えて、建造物の5分の1を永続的に自由に使えること。さらに加えて、建物の管理に支障をきたした場合にその建物を壊す権利(この最後の前提条件のために、それ以来、交渉は凍結状態に至っている)。コターニは、それに先だち、「現代心理学の治療に関する考え方は、これまで建築において実現されたことがない」ことを強調して、この企画を治療的な遊戯都市として呈示することを提案した。また、サドによって記述された建築の実現を検討することを、さらにはっきりと提案した。彼はまた、次のことを明らかにした。「軍事産業は、現在、社会の技術力全体を測る尺度である。われわれの企画は、明らかに建設業界の能力を超えた技術を前提としている。軍事方面に向けられた研究予算に匹敵する予算を手に入れる必要がある」(例えば、多くの国家の共同出資で作られた、ジュネーヴのサイクロトロン)。ヨルンが賛成して、「文化的資源を所有する者にとって、芸術家は、洞窟の人間であり、そこから外に出るときに許されている権利は、彫刻に組み込むために産業の金属屑を取ってくることである。われわれはそのような小さな誤りを正そうと思う! 謹み深く、われわれは、現代芸術を開始する権利、すなわち、芸術文明の洞窟から出る権利を要求する」と述べた。ヨルゲン・ナッシュは、「あらゆるユートピア的建築物は、理想都市に基づいて表現されていた。われわれは理想というものに反対である。われわれは、昔のユートピア的な考え方にある理想主義的完璧主義を批判すべきである(そしてフーリエの批判も)。われわれは、何1つ申し分ないとは見なさない」とはっきり述べた。評議会は、イタリ

ア南岸に近い無人島における、実験的ミクロ都市の定義のための基礎的な仮説をいくつか採択した。

この会議に来られなかったシュトゥルムの代理人であるH・プレムは、アメリカの警察とテレビ関係者がノーマン・メイラーに向けたひどい仕打ちに、評議会の注意を促した。その仕打ちは、妻に対する刃物沙汰を口実としているが、実は、反体制的知識人の信用を失墜させるためのものである。評議会は、UU〔統一的都市計画〕について、S Iドイツ誌の特別号を出すことを決めた。また、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第6号のプランを決定した。ナッシュは、イエーテボリ大会の具体的な構成に関するいくつかの問題を、評議会の決定に委ねた。

*

中央評議会の第3回会議は、ミュンヘンで4月11日から13日にかけて開催された。通常業務の処理のほかに、評議会は、2週間前に美術商ファン・デ・ローがかけようとした圧力の余波を受けて、採択すべき制裁を決定しなければならなかった。ルール地方のブルジョワたち——彼らは自分たちに相応しい統一的都市計画を捏造してみる気になった——の企てになんらかの形でかかわっているこの人物は、彼の事務所に財政的に依存している4人のドイツのシチュアシオニストに対して、経済的な恐喝の手段に出ることができると思い込んだ。つまり、その4人に対して、彼と縁を切りたくないなら、S Iの活動のいくつかの側面を（そして特にドウボールを）否認せよと命じたのである。ドイツのシチュアシオニストたちは即座にその商人との断交を選んだ。その商人はまもなく彼ら宛の電報で、この件を闇に葬るためにかなりの金額を申し出た。彼らは、それをつまらない冗談と判断して応じなかったので、「買い主」は、あの間抜けな電報はまったくの冗談だと、後で第三者に説明せざるをえなかった（しかし、彼が金銭問題で冗談を言っているところを人に見られたのは、彼の生涯で初めてであった）。この注目に値する事件は、文化の前衛の歴史において、少なくともいくつかの点でユニークなものであり、それらの点の間抜けさ加減もまた独創的であるが、これが不幸にもモーリス・ヴィッカール*7の失踪を引き起こした。ヴィッカールもまたその商人と関係していて、それでかなり金回りがよかったとはいえ、彼は皆に、ファン・デ・ローがS Iと縁を切るならば、彼自身もファン・デ・ローと縁を切る覚悟であると通知した。しかしながら、評議会は、その商人が、その商人とこれまでまったく何の関係もなかった「S Iと縁を切る」か否かをいまなお自由に選べると考えるようなことは、とうてい受け入れられないと判断した。ただ単に、何人かのシチュアシオニストと個人的な関係を待つ—美術商が、S Iの事に干渉しようとする明らかな企てだけがあったのである。その美術商はまた、まさに脅しと甘言を弄して、S Iの内部に彼の党派を作って、S Iの政治方針を変えることを目指していたのだ。それゆえヴィッカールは除名された。

評議会のこの会議では、アスガー・ヨルンの脱退が了承された。彼にとってS Iの組織的な活動への参加を今後きわめて困難にしているさまざまな個人的事情にかんがみでのことである。ち

なみに彼は、彼とS Iの完全な意見の一致を文書で表明したいと希望した。評議会は、この措置によって一時的にメンバーは四人に減ったが、もう、インターナショナルの次期大会以前には招集しないことで合意した。新たなメンバーを指名するのは、その大会の権限である。

*

まったく本題から逸れるが、シャン・コー*8氏は、7月27日付の『レクスプレス』誌で、メス*9の駅は「ゲルマン的な暗い妄想によって建築されたものであり、思うに、シュルレアリスト・インターナショナルの次の会合はそこで開かれるのがよからう」と、推奨した。しかし実際には、近日中に開催される予定の、シチュアシオニスト・インターナショナル第5回大会は、8月28日、スウェーデンの港町イエーテポリに招集されている。

PRINTED IN FRANCE C h-ベルナール印刷社、パリ18区、クロワ街27番地

*1: エドウィン・M・シュアー (生没年不詳) おそらく米国の犯罪学者。1960年代から70年代にかけて、「社会的反作用(ラベリング)理論」を展開した。その理論は、犯罪・非行とは社会の側からそのようなラベルを貼られた行為であるという見地から、そのようなラベル貼りが社会的反作用として機能して、犯罪・非行者のような社会的逸脱者を生み出すと指摘するものである。なお、姓「シュアー」は、「シャー」とも表記される。

*2: ジャック・ゲルバー (1932-) アメリカの劇作家。1959年、第1作の『コネクション』が、演劇にジャズや麻薬を導入しリアリズムを超えたとして、オフ・ブロードウェーに新風を巻き起こした。

*3: ウィリアム・バロウズ (1914-) 米国の作家。自らの麻薬体験に基づいた小説『ジャンキー』(1953年、ウィリアム・リー名義)、『裸のランチ』(パリ版、1959年)などで、幻覚的でグロテスクな世界を描いた

*4: アレクサンダー・トロッチ イギリス国籍のシチュアシオニスト。S Iのなかではセクション無所属で、1961年以降S I中央評議会のメンバーとして活動。1964年年秋に自らが推進していた文化運動「プロジェクト・シグマ」の最初の刊行物発行に際して、S Iを関わり合いにならせないために脱退

*5: ノーマン・メイラー (1923-) 米国の小説家。第二次大戦に参加した経験に基づいた小説『裸者と死者』(1948年)によって認められた。その後、実存主義やビート・ジェネレーションに影響を受けた作品『私自身のための広告』(59年)、『われわれはなぜヴェトナムにいるのか』(67年)などの自伝的・ルポルターシュ的作品を発表し、合衆国の政治状況を批判して若者たちに熱狂的に受け入れられた。

*6: ステファン・ラーソン、カティア・リンデル 両者ともSIスカンディナヴィア・セクションのメンバー。スウェーデン国籍。1962年3月に除名。

*7: モーリス・ヴィッカール S Iベルギー・セクションのシチュアシオニスト。1961年除名。

*8: ジャン・コー (1925-93) フランスの作家。1961年、4人の囚人の悪夢にも似た対話からなる小説『神の哀れみ』でゴンクール賞受賞。一時サルトルの秘書をしたこともあるが、やがてサルトルや左翼に反発して右翼的な

道徳を称揚する。

*9：メス 仏独国境地域のモーゼル県の県庁所在地。1870－71年の普仏戦争の激戦の舞台となり、フランスの敗北によって、以後1918年までドイツに併合されていたことで知られる。

1961年10月30日という日がどんな日だったか、いまでは、憶えているものは世界中でもそう何人もいないだろう。

この日、停止していた核実験を9月1日から再開したソ連は、50メガトンの超大型水爆の爆発実験に「成功」した、と発表した。

この日、このニュースを知った西ドイツの芸術家グループは、自分たちの活動の歴史を記す文章を、つぎのような一節から書き起こした――

「きょう、1961年10月30日、フルシチョフはかれの超大型爆弾を爆発させた――人びとは深刻な顔をし、喪服を着用。こんな事件など、べつにたいしたことではない。なにしろ、グルッペ・シュプールがちゃんと存在しているのだから。フルシチョフはかれの臭い爆弾を自分で発明したわけではない。われわれは、しかし、われわれの爆弾を自分で発明している。1発目は、1959年の1月に爆発した。1957年設立のメード・イン・ジャーマニィ、グルッペ・シュプール。名称は、1958年1月に雪解けのどろんこ道で発見された。」

ミュンヘンのビヤ・ホールで、ビールのコースター、つまりジョッキの下に敷くフェルト紙のビヤ・マットに、わけのわからない絵を書きながっている若い画家たちがいた。1930年代前半から中葉に生まれた世代だったかれらは、58年1月「グルッペ・シュプール」の名乗りをあげた。32年生まれのヘルムート・シュトゥルムが最年長で、そのとき25歳だった。1つ年下のロータル・フィッシャー、さらに1年下のハイムラート・プレム（かれは78年に44歳で死んだ）、そして1936年生まれの最年少、ハンス・ペーター・ツィンマーは21歳で、メンバーはこの4人だけだった。

翌59年1月に第1発目の爆弾、すなわち「宣言(マニフェスト)の雨」がミュンヘンのうえに20万枚のビラとなって降りそそいだとき、それに署名しているメンバーは、9人にふえていた。「宣言」の全21項目のなかには、たとえばつぎのような文言がふくまれている――

- 1、こんにち、道徳再武装なるものと対立しながら、未来をはらむ、芸術的なひとつの再武装が存在する。ヨーロッパは、大きな革命に、無比無類の文化的な一揆(クーデター)に、直面しているのである。
- 5、文化を創出せんとするものは、文化を破壊しなければならない。
- 9、芸術は、真理とは何のかかわりもない。真なるものは、ふたつの事の間にある。客観的たらんとするものは、一面的であり、一面的であるものは、術学的(ペダンチック)で退屈だ。
- 10、われわれは包括的だ。
- 11、すべてが過ぎ去った、倦怠の世代も、怒れる世代も。いまはキッチュの世代の番だ。われわれは要求する、キッチュを、クソを、ヘドロを、砂漠を。芸術はゴミの山であり、そのうえではキッチュが育つ。キッチュは芸術の娘だ。娘は若くてかぐわしく、母親は老いさらばえて悪臭を発する女だ。われわれが欲するのはただひとつ、キッチュをひろめること。

- 12、われわれは要求する、誤謬を。構成主義者たちと共産主義者たちは、誤謬を廃棄して、永遠の真理に生きる。われわれは真理に反対だ、幸福に反対だ、満足に反対だ、良心に反対だ、脂肪ぶとりの腹に反対だ、調和に反対だ。誤謬は、人間のもっともすばらしい能力である！ 何のために人間はあるのか？ もはや自分にはふさわしくない過去のさまざまな誤謬に、ひとつの新たな誤謬を付け加えるため。
- 13、ある抽象的な理想主義（かんねんろん）のかわりに、われわれはひとつのまともなニヒリズムを要求する。人類の最大の犯罪は、真理とか公正とか進歩とかより良い未来とかの名目で犯されるだろう。
- 16、抽象によって、四次元空間は自明のものとなった。未来の絵画は多次的であるだろう。無限の次元がわれわれのまえに立っている。
- 19、われわれは点描派（タシスト）の第3の波だ。われわれはダダイストの第3の波だ。われわれは未来派の第3の波だ。われわれはシュールレアリストの第3の波だ。
- 20、われわれは第3の波だ。われわれは多くの波のひとつの海だ（シチュアシオニスム）。
- 21、世界はただわれわれによってのみ瓦礫の山を一掃されることができる。われわれは未来の画家である！

この宣言とほとんど時を同じくして、グルッペ・シュプール、つまり痕跡（シュプール）グループは、ひとつのスキャンダルによって戦後芸術の歴史に痕跡をのこすことになる。59年1月にミュンヘンで、「過激派リアリスト展」という美術展が開かれ、シュプールのメンバーたちもこれに参加した。当時きわめて著名だった情報言語学者マックス・ベンゼが開会記念講演を行うことになっていた。ところが当日になって、ベンゼは都合で来られないことになり、かわりに、かれの講演を吹き込んだテープが届けられた。聴衆は、テープレコーダーから流れるベンゼ教授の講話を拝聴したのである。

ところが、当のベンゼは、これを夢にも知らなかった。そんなテープを吹き込んだこともないし、そもそも講演を引き受けたこともない、というのである。これが、既存の権威にたいするビヤ・マット芸術家たちの、公然たる戦いの第一幕だった。だが、それは、ミュンヘンという、一都市だけにとどまる戦いではなかったし、また、「奇跡の経済発展」（日本の「高度成長」とぴったり一致する）を遂げ始めていた西ドイツの境界内だけにとどまるものでもなかった。同じ1959年の4月、われらは、「文化的なクーデターが——諸君の眠（ね）ているあいだに！」と題するアピールを発した。4月21日木曜日午前10時に開会される「インターナツィオナーレ・ジトゥアツィオニステン第3回総会」への参加呼びかけた。コンスタント（オランダ）、ドゥボール（フランス）、ヨルン（デンマーク）、ピノト＝ガリツィオ（イタリア）、ウィッケルト（ベルギー）と並んで、シュプールのH・P・ツィンマーがドイツ代表としてこの呼びかけに名を連ねていた。「なぜグルッペ・シュプールが宣言を起草し、ベンゼ教授を攻撃したのか、〔……〕なぜミュンヘンがもはや2度と平安を見出すことがなくなるのか、この機会に皆さんはその話のつづきを開くことになるでしょう。話のつづきは、ますますひどいものにな

るでありましょう！」と、アピールは述べていた。

「アンテルナショナル・シチュアシオニスト」に加入したシュプールは、ギイ・ドゥボールとともにシチュアシオニスト運動の中心メンバーだったデンマーク人、アスゲル・ヨルンの積極的な共同作業のもとに、翌61年8月、機関紙『シュプール』を創刊し、同紙は同じ年の11月と12月には、あいついで2号、3号と続刊された。そのかん、9月にロンドンで開かれたシチュアシオニスト・インターナショナルの第4回総会にも、メンバーが出席している。機関誌の第4号は61年春に、第5号と第6号は同年夏に刊行され、またこの年には、スカンディナヴィア諸国とイタリアへもメンバーが旅行し、それらの地でシュプール展が開かれた。フルシチョフの50メガトン爆弾についての言及で始まる「シュプール史」という一文が書かれたのは、その1961年秋のことだった。

だが、まさにその61年10月の第7号が、雑誌『シュプール』の最後の号となった。同年11月、西ドイツ治安当局は、第7号を除く同誌の既刊6冊すべてを、「洗神罪」および「名誉毀損罪」、ならびに「猥褻物頒布罪」違反のかどで押収し、シュプール・メンバーの居宅の家宅捜索を行なったからである。この家宅捜索は、1954年以後、すなわちナチ体制の崩壊以後、西ドイツで行なわれた最初の、芸術家にたいする捜索だった。捜査当局は、62年5月、シュトゥルム、プレム、ツィンマー、クンツェルマンの4人を前述の罪で起訴し主として雑誌第6号（61年8月）の内容のゆえに、5カ月の禁固刑の判決が下された。この抑圧にたいして、シュプールは、62年1月に『シュプールの本』を刊行し、雑話の全7号分と、別冊としてそれまでに発せられていた宣言などを、それに収録することで応えたのだった。

西ドイツのシュプールがインターナショナルな表現運動の一構成部分として活動したのは、そこまでだった。なぜなら、1962年2月、シュプールは、シチュアシオニスト・インターナショナルから除名されたからである。それ以後もなお、グループは、根拠地のミュンヘンをはじめ、ハイデルベルク、ヴェネツィア、ニューヨーク、パリなどの詰都市で、独白の作品展を開いたり、あるいは美術展に出品したりする仕事をつづけ、1965年に、グループとしての活動に終止符を打った。

後期印象派の点描（タッチ）、ダダイズム、未来派、シュールレアリスムなど、20世紀の現代芸術のさまざまな前衛的試行のあとを受けて、グルッペ・シュプールは、「芸術」と「美」の概念そのものへの攻撃をくりかえし、人びとの美的な「感性」を逆なでするような表現を明るみに出しつづけた。図版や写真で見ることかぎり、彼らの素描も彫刻も、かれらの言う「クソ」や「ヘドロ」や「砂漠」にふさわしいものだった。「キッチュ」の概念を的確に意味づけるのは難しいが、かれらの絵は、子供の（しかも無邪気でなどない子供の）なぐりがきか、泥酔扶熊でのスケッチか、あるいは退屈な会議の席で、配布されたつまらぬ資料のコピー用紙の余白に、心ここにあらずの気分で描いてしまうあの無意味な図形に、よく似ている。かれらの彫刻は、それが彫刻と呼べればのはなしだが、ただわけもなく粘土をこねくりまわして、というよりは考えられるかぎり大きな嫌悪感を見るものに与えようと頭をひねくりまわして、でっちあげた形象、というしかないもののように見える。一口で言えば、これらの「作品」は、2世紀以上にわたって欧米文化圏で、そしてそれに追従するいわゆる文明社会で、「芸術」とされ「美」と讃えられてき

たものにたいする、一連の叛逆と内部告発の試みを、極限まで押し進めようとするものだった。

だが、西ドイツのグループ・シュプールが試みたことの歴史的な意味は、もうひとつあるだろう。それは、50年代末から60年代初頭の時点で、ドイツの社会に生きる「第三帝国」との連続性、死んでもいなければ過去ともなっていないナチズム時代の現存を、かれらが身をもって暴露し、告発した、ということにほかならない。

さきに述べたとおり、61年11月の当局による『シュプール』押収とそれにもなう家宅捜索は、「戦後民主主義」体制のなかで初めてなされた芸術家にたいする捜索と刑事訴追として、ナチ時代のあの「類廃芸術」弾圧が蘇生したことを人びとに気づかせた。そればかりではない。1960年初春、H・A・P・グリースハーバーがカールスルーエの美術学校から去るという事件が起こった。辞職の理由は、ナチス時代に制定された指針に従って試験が行なわれていたからだった。このグリースハーバーは、同年10月に、ミュンヘンの「芸術館」内で逮捕された。1937年に「ドイツ芸術館」が開館したさいのヒトラーの演説を抜粋してビラをつくり、それを館内で配布したためだった。もちろん、ヒトラーが建てた「ドイツ芸術館」の後身が、ミュンヘンの「芸術館」にほかならなかったのだが、ナチの「ドイツ芸術館」は、あの有名な「退廃芸術展」——表現主義やダダの作品を、全国から押収して集め、非ドイツ的芸術の実物見本として見せしめに展示し、反共・反ユダヤ人・反平和主義・反前衛芸術の一大キャンペーンをくりひろげたもの——の会場からほんの200メートルほどのところで、‘まさにこの「退廃芸術展」の開催中に、その「退廃」ぶりをいっそうくっきりときわだたせるために新築オープンされたのである。ヒトラー自身が開館記念式典に出席して演説を行ない、鳴りもの入りで喧伝されたこの芸術の殿堂には、御用芸術家たちの諸作品が「純正芸術」の折り紙つきで陳列された。ところが、連日長蛇の列ができた「退廃芸術展」とは対照的に、「ドイツ芸術館」のほうの展示室は、閑散とした毎日だったのである。

逮捕されたグリースハーバーにたいして、グループ・シュプールはただちに連帯を表明した。当局は、グループが以後「芸術館」に作品を出品することを禁止する措置で応えた。その根拠は、61年1月にグループが発した「1月宣言」の理念が、「芸術館」にふさわしくない、というものだった。宣言のなかで、グループは、芸術の目的と実践は「楽しみ（ガウディ）」であるべきだ、という主張を展開しながら、つぎのように述べたものだった——

- 3、真の芸術家はだれも、自分の周囲の世界を変革するために生まれたのだ。
- 4、賞だの、助成金だの、好意的な批評だの、ありとあらゆるものを投げてよこすがよい。しかし、ひとつのことだけは確かだ——われわれは利用などされないということ。
- 5、利用できない無用のものになることが、われわれの最高の目標である。楽しみ（ガウディ）は非俗な民衆芸術なのだ。
- 15、社会主義革命は芸術家を濫用した。これらの変革の一面性は、労働と楽しみとの分離にもとづいている。楽しみを抜きにした革命は、革命ではない。

グループにたいする弾圧の直接のきっかけとなったグリースハーバーは、61年11月9日にミュンヘン検察局が『シュプール』誌のバックナンバーの残部すべてを押収したさいの抗議ビラに、グループの5名の署名者に連帯する賛同人のひとりとして、他の30名（その多くは、ドゥボールやアスゲル・ヨルンらをふくむシチュアシオニスト・インターナショナルのメンバーだった）とともに名をつらねている。

芸術表現と社会変革とを不可分のものとして結合させ、しかもそれゆえにこそ政治に従属しない自律的な芸術による芸術破壊を志向したグルッペ・シュプールの活動は、明らかにひとつの転換形を西ドイツ社会が迎えていた時期に、その転換と無関係にではなく行なわれたのだった。いわゆる東西冷戦の深刻化とベルリンの壁の構築は、まさに、

『シュプール』誌の創刊と押収とのあいだの一時期のことだった。「未来をはらむ、芸術的なひとつの再武装」たるみずからの志向の対極にある動きとしてシュプール結成宣言の冒頭で言及された「道徳再武装」にしても、単なる抽象的な観念として引きあいに出されたのではない。もはや戦後ではない、ことが明らかになっていた西ドイツ社会で、それは、新しい戦時体制にふさわしい反共の倫理主義的社会運動として、道徳再武装の名のもとに、MRAの略称で、人びとの意識と娯楽の領域に浸透しつつあったのである。娯楽、というのは、MRAのキャンペーン活動は、ナチスばりのシュプレヒコール劇として、劇場や公会堂や野外で、チャリティ・ショーさながら、人びとを安価な芝居の観客のように、動員していたからだ。60年代初頭、このMRAは、日本にまでやってきて、労演（労働者演劇運動）感覚で反共宣伝劇を上演して廻ったのだった。

グルッペ・シュプールが「楽しみ」を芸術の、そして社会革命の、本質的に重要な要因として、また最高目標として提起したとき、グループ自身はどれだけそれを意識していたかはさておき、「楽しみ」を収奪し利用するこのMRA（Moral Re-Armament; Moralische Aufrüstung）ドイツ版——もともとは1938年にアメリカ合衆国で始まったこのMRAのドイツ版が、西ドイツ社会に根を張りひろげようとしていたのである。その運動のモラリズム、秩序翼賛、そしてあらゆる社会変革への深い敵意にたいして、シュプールがそれとは逆の「楽しみ」を、みずがらの実践によって、どのように対置していくことができるかが、じつは問われていたのだった。人種差別主義に依拠し、過去の歴史の忘却を糧とするMRAとは逆に、シュプールは、国際連帯と、歴史の想起とを、起爆力として追求した。だからこそ、1965年にひとまず終止符を打ったシュプールの蜂起は、すぐあとにつづいて始まる学生たちと若い労働者たちとの叛逆に、そのままつながっていったのである。

1950年代末から1960年代にかけて、建築あるいは都市計画の分野ではひとつのパラダイム・シフトが起こりつつあった。

C I A M（国際近代建築家会議）が崩壊した1956年以降、機能主義の乗り越えが様々に摸索され始める。「機能」に変わる「構造」概念の導入、あるいは、成長、変化、代謝、過程、流動性といった「時間」に関わる諸概念の導入がそうである。また、「機能」に対して、素朴にその「内容」（地方性、有機性、人間性、生活、心理、想像力、自然、伝統……）を対置する諸傾向が次々に現れてきた。

いま振り返って見ると、近代建築批判、近代都心計画批判に関わる重要な著作が1960年代初頭に集中していることがわかる*1。都市計画の画一性と不毛性を経済学的・社会的に分析し、都市における公園や街路の重要性を主張し、その多様性を維持するための小街区方式を提案した、J・ジャイコブスの『アメリカ大都市の死と生*2』（1961年）、都市の意味論的、象徴論的次元を提起した、K・リンチの『都市のイメージ』（1960年）、ポストモダン建築の最初の理論書、R・ヴェンチュエリの『建築の多様性と対立性*3』（1962年）、設計計画のプロセスの徹底した論理化を目指した、C・アレグザンダーの『形の合成に関するノート*4』（1964年）などがそうである。

日本には、都市や建築を新陳代謝するものとして捉えるメタボリズム理論と様々な都市プロジェクト（丹下健三「東京計画1960」、菊竹清訓「海上都市」「塔状都市」、磯崎新「空中都市」、黒川紀章「空間都市」「垂直壁都市」がある*5。

「アルバのジプシー・キャンプ」（1956年）にはじまるコンスタントの「ニュー・バビロン」構想もそうした大きな流れの中で見ることができるだろう。コンスタントの名は日本では全く無名であるが、彼を建築へ導いたと思われる建築家アルド・ヴァン・アイクはよく知られている。「ニュー・バビロニアン」と呼ばれる住民は固定した住居をもたないノマドである。一方メタボリズムの場合、移動空間単位カプセルで構成されるメタポリスが未来都市の理想とされた。移動性を強調する点は似ている。「ニュー・バビロン」の周縁部分である「黄色地帯」のプロジェクトも、土台の構造物の上に、移動、交換、解体可能な様々な要素が整備されるという発想である。メジャーな基幹構造（インフラストラクチャー）とマイナーな構造を分離する考え方は当時共有化されていた。都市の要素を変えるものと変わらないものに分け、時間的、機能的変化に対応しようというのである。「機能主義的な都市を否定するのではなく、乗り越えるのだ」という構えもよく似ている。

1960年代初頭、都心の未来は悲観されてはいなかった。都市は理性的な諸対応によって統御できるものと信じられていた。コンスタントの一連の興味深いプロジェクトは、「もう1つの生活のためのもう1つの都市」のための様々なアイディアに満ちている。そこでは「統一的都市計画」という概念はポジティブなものである。

しかし、60年代初頭の建築家による未来都市のプロジェクトはすぐさま色あせたものとなる。S I 脱退（60年）以後も「移動式はしごのある迷宮」（67年）など72年まで「ニュー・バビロン」の都市計画を構想し続けたコンスタントはある意味では執拗である。日本でも197

0年の大阪万国博の会場が擬似的な未来都市として実現するまでは余韻が残っていたと言えるかもしれない。しかし、一般に都市構想を白紙の上に描き、その技術的可能性を問うスタイルは、現実の過程で多くの批判にさらされることになったのである。理念の性急な実現（ニュー・タウン建設）が様々な葛藤を生むのは当然であった。

コンスタントやメタポリストの技術主義を批判するのは容易い。H・ルフェーブルのいう「社会的総空間の商品化」の進行、すなわち、空間の均質化、軽量化、交換価値への還元動きは、工業的合理性の貫徹として、工業化、技術革新といったテクノロジーの発達と不可分なのである。移動可能な空間単位で構成される都市を構想することは、「社会的総空間の商品化」のメカニズムを技術的に裏打ちするにすぎなかったのである。

さらに、C・アレグザンダーが暴いたのは、建築家の都市計画プロジェクトが全て「ツリー構造」をしていることだ*6。一見複雑に見える都市プロジェクトも分析してみ見ると頂点（中心）があって段階的に部分へ至るヒエラルキカルな構造をしているのである。現実の都市はツリーなどではなよ編目状（セミ・ラティス）だ、とC・アレグザンダーはいう。

「都市計画は存在しない。それはイデオロギーにすぎない」。

「都市計画は都市計画批判としてしか存在しない」。

ドウボールらシチュアシオニストによる都市計画批判は、極めて根源的なものであった。「統一的都市計画」とは「日常生活批判」の実践なのである。

H・ルフェーブルがシチュアシオニストとどういう関係にあったかは知らない。しかし、その『総和と余利』（59年）『日常生活批判』（58年、61年）などが『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌上で触れられるところを見ると、少なくとも60年前後には密接なつながりがあったのであろう。H・ルフェーブルの都市計画批判とシチュアシオニストの都市計画批判には明らかに呼応関係があるように見える。

1960年代末から70年代にかけて、都市計画は徹底した批判にさらされることになる。そうした中で最もラディカルで体系的であったのがH・ルフェーブルの一連の著作である*7。かれはその『都市革命*8』とにおいて、むしろ、都市計画の依拠する全体性（「統一的都市計画」？）の概念こそ問題であり、幻想であるとするのである。

都市計画とは「石とセメントと金属の線で、テリトリーのうえに、人間の住居の配置・秩序を描く活動」であるとH・ルフェーブルはいう。そしてさらに都市計画とは、都市的な実践を自らの秩序に従属させ支配させる活動である。確かにそうだ。しかし、都心計画にとってそれが出発点である。また、都市計画批判にとってもそうである。

問題は都心計画の一元的性格である。それは芸術科学であり、同時に技術であり認識であると思っているがその一元的性格が幻想をおし隠すのである。

第1に、都市現象の科学、すなわち都市認識のレベルと都市計画の実践レベルが分裂している。この分裂は極めて本質的である。いかに「統一的都市計画」は可能か。

第2に、都市計画自体が分裂している。ヒューマニストの都市計画、プロモーターの都市計画、国家テクノクラートの都市計画、都市計画にもいろいろあるのだ。制度とイデオロギーに分離しているにも関わらず、体系性、完全性への幻想、ユートピアのみが語られる。この分離に眼を

つむることは欺瞞である。

第3に、都市計画は都市的実践（生活のリアリティ）を覆い隠す。全てを空間・社会生活・諸集団とその関係の表象に置換してしまう。具体的に、空間の生産、生産物としての空間、すなわち社会的総空間の商品化のプロセスを見落とす。すなわち、空間支配の資本の論理、社会空間の分配の経済論理を、実証的でヒューマニスティックでテクノロジックな外観で、覆い隠す。さらに例えば、病理的空間（スラム、不良住宅地）の治癒という医学的イデオロギーの背後で、抑圧的空間の再編成をするにすぎない。これまた本質的である。ヒューマニスティックな装いのもとに抑圧的空間が再編成されるのは犯罪的でもある。

第4に都市計画は一貫性を欠いている。むしろ、都市計画によって都市の現実、理論的一貫性を欠いたものへと断片化される。これは第1の分裂と関係し、問題を複雑化させる。

H・ルフェーブルは都市計画に対する根源的批判をたたみかけるように展開する。その批判は、単に、いくつかの分裂を再統合すればいい、といったレベルのものではない。都市計画そのものがその本質的に都市現実の真実を覆い隠すというのである。

そして、都市計画にとって、最大の問題としてH・ルフェーブルが指摘したのが都市住民の沈黙、受動性であった。この沈黙、受動性こそ都市計画が真に克服すべき課題であり続けているように思う。

こうした根源的批判に照らして、その後の展開はいささか心細い。冒頭に挙げた4人の評論家の仕事はそれぞれ貴重なものであったと言っていい。しかし、それぞれが限界をもつことは明らかである。われわれができることは、この根源的な都市計画批判から出発し、繰り返し立ち戻ってきて常にそのあり方を問い直すことであろう。最悪なのは、都市計画の幻想を自ら覆い隠して気がつかないことなのである。

*1：拙稿、「都市計画批判のプロブレマティーク——啓蒙・機能・普遍から参加・支脈・場所へ」、『都市計画』、1997年。

*2：J・ジェイコブス著、黒川紀章訳、鹿島出版会、1969年。残念なことに、第3部、第4部は翻訳されなかった。J・ジェイコブスは、それに先立つ「下町こそ人々そのもの」（フォーチューン誌）で知られるようになった。また、『都市の経済』（1969、中江利忠他訳、邦訳名『都市の原理』鹿島出版会、1981年）において都市が農村に先立つという説を唱えた

*3：R・ヴェンチャーリ著、伊藤公文訳、鹿島出版会、1981年。刊行は1966年であるが、1962年にニューヨーク近代美術館刊行のシリーズの第1巻として執筆された。

*4：C・アレグザンダー著、稲葉武司訳、鹿島出版会、1973年。本書に先立って「革命は、20年前に終わってしまった」（1960年『A+U』、1971年4月）、シャマエフとの共著『コミュニティとプライバシー』（1963年、岡田新一訳、鹿島出版会、1967年）がある。

*5：拙稿、『戦後建築の終焉』、れんが書房新社、1995年

*6 : C・アレグザンダー、「都市はツリーではない」。

*7 : 『都市への権利』（筑摩書房）『都市革命』（晶文社）『空間の生産』（晶文社）などH・ルフェーブルの著作は数多くが翻訳され日本に紹介されている

*8 : 今井成美訳、晶文社、1974年。